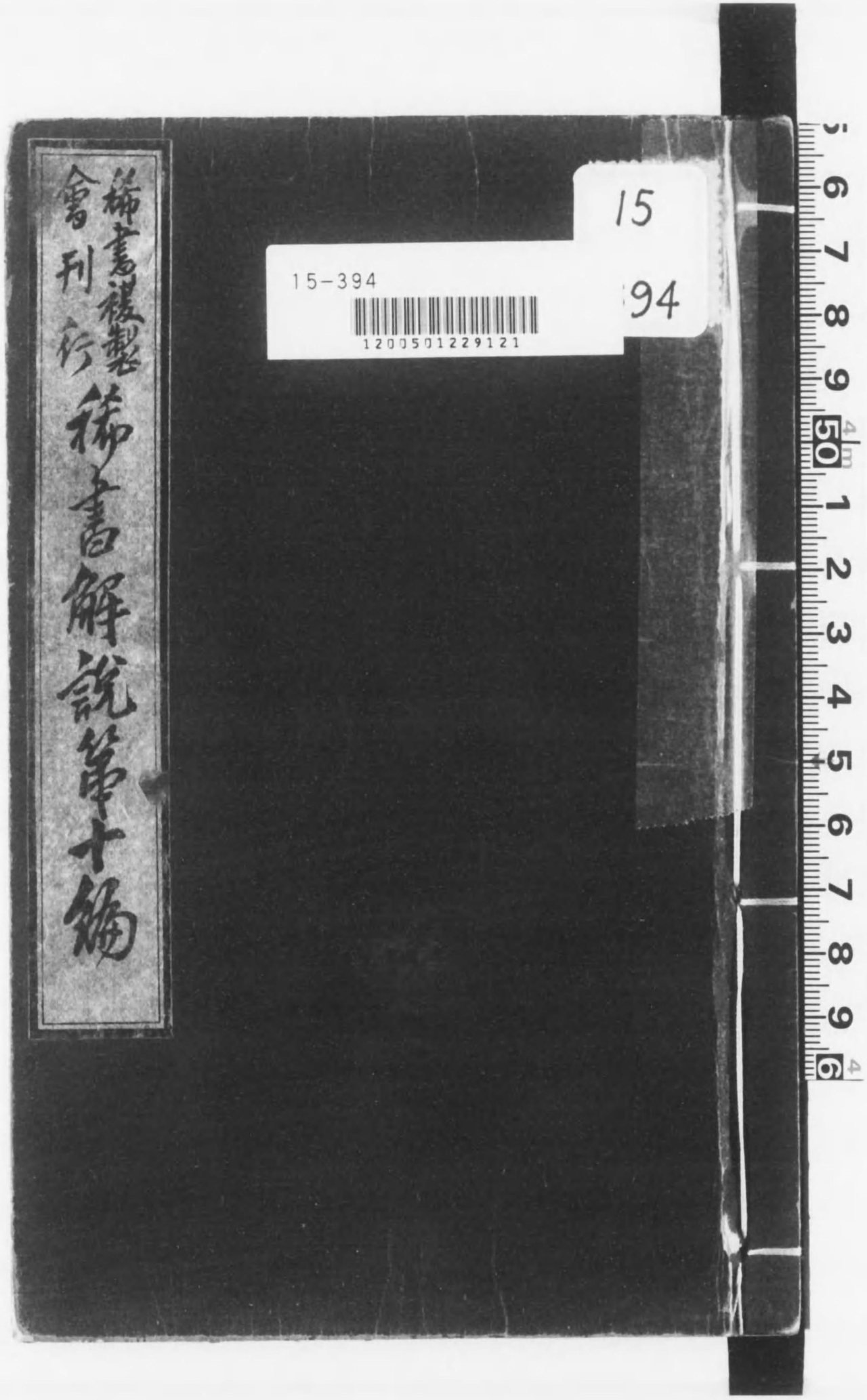

始

稀書複會
製刊行

稀書解說第十編

半紙本（原本は中本）　六冊

女諸禮集

足利氏以來、武家の禮式著るしく複雜となり、その應接進退一々順序ありしが、戰國に至りて全く地に墜し、僅に有職家によりて保守せらるゝの狀態なりき。德川幕府樹立するに及び、文敎の興隆と共に律令節度整ひ、禮儀作法また備りて、荒けなき前代の弊風漸く革まれり。從つて婦女敎育に關するものも生ずるに至り、まづ寬永に『女訓抄』出て、下りて萬治に『假名列女傳』寬文に『本朝女鑑』などが、假名草子の體をかりて、情操修養の書として刊行されたり。またこれと前後して女子專用の躾方書、卽ち冠婚祝賀の心得、禮儀作法の要領、服裝化粧の注意等の內容を有するもの出版せらる。そが中に最も知られしは、萬治三年春版行の『女諸禮集』なるべし、この書大本にて取扱ひの不便なりし故にや、同年夏に折半型六冊本出てたり、これ卽ち本書なり。所載記事また大本と甚しき增減なく、挿繪また然り。殊に題簽に目覺しき特色ありて、轉た大まかなりし時代の裝幀意匠を窺ふに足る。

徳川初期の女子教育は、家庭における實地指導と、見習奉公以外に、格別の方法なかりしが、かかる躾方書の出でしより、女性の風儀習俗を善導し、婦徳好尚を向上するために、顯著なる效果ありしこと疑ふべからず。かの『女訓抄』以下の諸作が、王朝時代の小説に倣ひ、讀過の間に物の哀れを味得する手法を取れると同樣に、本書も繁を省き簡を要とし、且つ高貴の禮法格式を軌範として述べ、率て一般家庭の主客應接に運用せしめんとせる上に、數多の挿圖を加へて眼に映ぜしめ、不知々々の間に修養し得るの用意周到なるが認めらる。

本書原本は竪六寸四分、横四寸五分、全六冊にて、卷一は十八丁（内、目錄三丁）、卷二は十七丁（内、目錄一丁）、卷三は八丁、卷四は十五丁（内、目錄二丁）、卷五は十三丁（内、目錄一丁）、卷六は十五丁（内、目錄一丁）を有せり。右の内、卷一の「六、七」の丁附を有するものは、第五の衣裳雛形に連續すべきもの〻外、卷四、卷五、卷六、の本文挿繪の順序も、また交錯する所あれど、いまは原本に從ひてそのまゝとしたるが、或は製本の過失にあらざるやの懸念あるをおそれ、左にその順序を記すこと〻せり。卽ち

（卷一）　一――七、十四――廿三、終丁。
（卷四）　一――七、七、三、八――十一、丁附無、十二。
（卷五）　一――十一、七、丁附無。
（卷六）　一、一――八、一、二、九、十一、十一、十二、十三。

稀書複製會刊行

稀書解説第十編

目次

女諸禮集……風俗書……萬治三年……一
都風俗鑑……同……延寶九年……五
當世かもじ雛形……同……安永八年……一〇
江戸名所記……地誌……寛文二年……一八
東叡山名所……同……天和二年……二三
ねごと草……假名草子……寛文二年……三一
元のもくあみ物語……同……延寶八年……三五
懐　硯……浮世草子……貞享三年……四〇
風流連理戀……同……享保二十年……四六

古今狂歌仙……繪入狂歌本……延寶七年……五四
美夜古物語……遊女評判記……（明暦初）……六〇
吉原下職原……同……延寶九年……六五
延命字學集……役者評判記……元祿十二年……六九
せりふ大全……歌謠書……（寶永初）……七四
時花唄……同……享保寛政……八〇

附錄

『稀書解說』補遺……九三
『正直咄大鑑』の初刻に就て……九四
新會期「第十期」の開始に當つて……九六

昭和十三年一月 友邦圖書

稀書複製會刊行

稀書解說第十編

例言

一、本編は、本會が第十期の事業として、昭和十一年十一月より、同十三年十月に至る二年間に複製刊行したる圖書十五部、三十九冊の解說を輯錄したり。

一、本編の編纂については、前期の分類例に倣ひ、同類のものは年代順に排列し、また原本に刊行年時の記載なく、編者の推定に係るものは、本編の目次において、その書名の下の年號に括弧を附して之を標示せり。

一、本編はすべて木村仙秀氏の執筆なれど、その考査尋究に關しては、伊原青々園氏澁田貞治氏、尾崎久彌氏、玉林晴朗氏、その他會友諸賢の垂教に負ふ所多かりしを以て、こゝに深甚の謝意を表す。

一、本會は、大正七年の創設にして、二年間を一期とし、茲に十期二十箇年を閲し、

複製圖書の數は、實に二百六十九部、四百〇六冊の多きに達し、外に解說十一冊を刊行せり。而して斯の如き業績を擧ぐることを得たるは、會員諸氏の絕大なる後援と、同人諸氏の懇篤なる指導に依れるは勿論なれども、その貴重圖書の複製を許諾されたる藏書家諸賢の恩惠に對しても、本會が感謝して措く能はざる所なり。

昭和十三年十月

稀書複製會

となるなり。また挿繪は見開のもの、卷二に七面、卷四に三面、半面のもの卷一に四、卷二に二、卷四に四、卷五に十二、卷六に六ケ所ありて、本文の主旨を助けをれり。

本書內容は、卷一の首めに、「女房つねに辨ふべき色々、女房躾方の次第、萬喰方の次第、喰方通ひの次第」、卷二は「嫁取言入眞草の次第、嫁入の次第」、卷三は「女中方通ひの次第、宮仕へする人心得へき品々」、卷四は「產屋の次第、誕生の次第、元服の次第」、卷五は「雛形正月より十二月して四季の小袖の模樣を知る事」と酒宴座配の作法を精叙し、卷六は「正月鏡（餅）の飾り樣の事、翠簾の式次第の事、進上物萬繪圖の事」及び、日常所用器具竝に女官次第、服忌の次第を記せり。各項の細目實に一百六十一條の多きに亙り、所謂女一ト通りの躾方を網羅して、一見繁雜の如くなれど、そは運用の妙機によりて、自在に驅使せらるべきの融通性ありしは勿論なり。

その刊行年時は卷末に、

右大本之女諸禮之通少茂不殘今又女躾方加善惡令板行者也

萬治三庚子中夏吉旦

錦小路通升屋平兵衞板

とあるにて知らる。因に寓目の大本刊記は「右女之躾方于世雖在數多今當加增補名女諸禮集正改令板行者也　于時萬治三庚子年青陽吉旦」とあり、出版書肆の名に「田中文內梓行」とあれど、その個所入木の痕歷然たり。さるは升屋の板木が後に田中文內の手に入りしものなるべし。（萬治三

年谷口重以版行の『百人一句』の板木が、田中文内の手によりて、寛文七年に入木再摺せる例あり）

巻中散見する所に、衣服食物其他の用語に耳遠きもの頗る多く、「染付の小袖」「襟袖をしほる」など、研究に資すべきものあるや必せり。殊に挿繪の内、巻一、巻五の衣裳雛形は、紋様集にはあらねど、おのづからにして後來雛形本の範疇となり、現在斯種のものにて本書より古きはあらざるべし、これ實に寛文の『新撰御雛形』の先驅をなせるものといふべし。しかも大本にては、衣桁の前に座せる人物なきを、本書にこれを添ゆるなど、改訂本としての面目をも備へをれり。就中、巻五の第二圖、第十圖、第十一圖にある「嶋」の意義は、今日謂ふ所の「シマ」（直線を主とせる縞）と異なり、かの「嶋物」といへるが、出所の分明ならざる物を指すが如く、その紋様の紆曲横斜せるを謂ひしなり。

また巻二の嫁入行列圖の先頭に「からげ錢」と「かね箱」とあるは、外觀の豪華を競ひし餘風とも見るべく、かの西鶴物に見る敷銀の風習さへも思ひ合されて、ありし昔の面影に一種の興趣を感ぜしむ。蓋し泰平打續き、四民その堵に安んずるや、禮儀作法漸く繁く、四條小笠原水嶋等の諸流が茶家者流と同じく、故實約束の嚴なるをよしとす、終にはその本旨を忘れて、自繩自縛に陷り、所謂手も足も出ぬ如くなりしも、必竟は本書一類の禮法書誤用の結果なりしなるべし。

（原本、東京、安田文庫藏）

都風俗鑑　四冊

半紙本

本書は元祿五年版の『廣益書籍目錄大全』巻五「好色并樂事」の部に、「四　都風俗かゞみ」とあるもの即ち是なり。しかも本書を引用せるは、柳亭種彦の『還魂紙料』（文政九年版）上巻の〔十一〕「夷屋吉郎兵衞」の條に「又、都風俗鑑（延寶九年印本　杏花園藏書）三の巻に「昔ゑびす屋吉郎兵衞右近源左が女形とてはやらせし折には、手拭にひとしき絹ぎれをかぶりて女がたとこそいひしに、今は又何者か仕出しけん鋼をもて甲をこしらへそれに髪をうへてかづらと名付てかぶり、舞かなでければ云云」といふ事を載たり」とあると、『柳亭遺稿』に「都風俗鑑（延寶九年印本）（巻二）に、物を縫奉公人をおるまといへり、中略外ざまへ出入には小袖をきねばかなはぬなり、中略帶のむすびは吉彌むすびとて、たうけんの耳のたれたることく二つ結びの兩はしをだらりとさぐるなり、帶屋どもは心得尺長きをこしらへ、吉彌むすびはこれ〳〵と直段ひときは高けれども云々」とあるの外、他にこれ無きが如し。また「杏花園藏書」とあるは、大田蜀山人藏本の謂にて、『南畝文庫藏書目』巻三の「時事」の部に、「都風俗鑑　四巻」とあれど、これまた流離していま何處にあるやを知らず。爾來その書名のみ傳りて、觸目せしものあるを聞かざりしに、たま〳〵名古屋平出文庫舊藏本出てたるを機として今期の複製書に加へ、以て多年待望の渴を醫することを得たり。

按ふに江戸時代初期の社會風俗は、その多くは繪畫によつて考察せられ、文書に至りては、若干

の假名草子あれど、それらは室町小說の形態を鵜呑みにせるものゝみにて、民衆の實生活を知るに足るもの、まことに尠少なり。その間三都とも遊里評判記の刊行ありたれど、これまた一方に偏し、その輪廓を窺ふに止まり、何となく不備の感ありしに、天和に至り、『好色一代男』以下の諸作出て、京坂を中心とせるその頃の世相が、まざ〳〵と曝露されたり。蓋し作者西鶴が俳壇を辭して連續的に執筆せる著述は、その犀利なる觀察と、鬱積せる含蓄とが奔流せるは勿論なれど、その文脈構想を前代の遺物たる假名草子と、數四の遊里書に受けたる以外、何かしら西鶴を小說界に趨かしめたる、有力なる暗示あらざりしや、思ひをこゝに致して本書に接せば、吁是ある哉と首肯する所頗る多かるべし。

本書は、その序文に「都の當世わつさりとうきに浮かれし男女貴賤、榮花のひらけし最中にして、戸さゝぬ赤土の片隅まで、折にふれたる諸分さま〳〵あり、人の風俗もひときわ通り者なりと、意氣路をあらそひ、是さ人は意氣路に世は投節と、ふり〳〵ふつたるありさま、ぬれにぬれにし四條河原、名取りの野郎に心をうつすもあり、或は思ひも深草や、君と伏見の撞木町、都の西の朱雀の里、東に行西に徘徊することは、直なる御代の以爲なり（中略）凡都のぞめき所の品々をつらね、又は女の風俗よりはしめ、色香にめてぬる物から、是はどうも言へぬ事、笑みを含める其事彼事、かぞへ記して四冊の草子となしぬ、實都の諸分なれば、京風俗鑑と名付侍るならし」とある如く、日本第一廓の稱ある島原は勿論、低級なる娼婦、風呂屋女、茶屋女、比丘尼等の職業的婦人よ

り、物堅き御物師、腰本、仲居、端女、さては商家の女房、娘など愛嬌を賣るものは、總べて「是色道の胴骨、たとへていはん詞なし」と喝破せるによりて、その內容の大要は知られん。更に加ふるに野郎の內幕描寫を以てせり。たゞ叙事簡明にて聊か抒情に乏しき所ありと雖も、これに血液を注ぎ筋肉を與へなば、かの『一代男』となり『一代女』となるものにて、所謂浮世草子の一源流は、こゝにもあるが肯はるゝなり。

本書原本は竪七寸二分半、横五寸二分、全四冊にて、卷一は十六丁（內序目錄二丁）、卷二は十六丁 內目錄一丁）、卷三は十五丁（內目錄一丁）、卷四は十六丁（內目錄跋二丁）なり、內題に『都色欲大全』、柱記に「笑大全」とあれば、或は外題替ならざるやの懸念もあれど左にあらず、序文にも「かぞへ記して四冊の草子となしぬ、實都の諸分なれば、京風俗鑑（みやこふうぞくかがみ）と名付侍るならし」とあれば、わざと內外題を異にせるものなり、この例は『女用訓蒙圖彙』その他にも見らる、柱記も好色樂事に關する笑論などの語あるより、聊か遠慮してしかいへるなるべし。

前述の如く、その內容が西鶴の作品に影響を與へたる所頗る多く、本書の卷一は『好色一代男』卷五以下に、同卷三は『男色大鑑』卷五以下に、その構想の一致せるが隨所に見らる。殊に本書卷二「物師腰本の風」は『好色一代女』の卷三「町人腰元」同卷四「墨繪浮氣袖」に、本書卷二の「中會はしたの風」は『一代女』卷四「榮耀願男」と『西鶴織留』卷六の「時花笠の被物」に、本書卷二の「娘を仕立る手入」は『一代女』卷一の「舞曲遊興」と「國主艶妾」に、本書卷二の「商

人の女房の事」は『一代女』巻五の「美扇懸風」に、本書巻四「風呂屋の風俗」は『一代男』巻一「煩悩の垢かき」と『一代女』巻五の「小歌傳授女」に、本書巻四「茶屋の風俗」は『一代女』巻五の「石垣の戀崩れ」に、本書巻四「伏見撞木町」は『一代男』巻一の「尋てきく程ちきり」に、本書巻四の「勸進比丘尼の風」は『一代女』巻三「調戯歌船」に最も示唆せるの大なるを覺へしむ。その字句行文も浮世草子さながらなるは、『一代男』『一代女』以前に何人がかゝる趣向の下に執筆せしや、これたゞに表題そのまゝの「風俗鑑」ならで、序文の「げに都の諸分」を記したる浮世草子にて、假名草子と西鶴とを連繫する過渡期の作品と言難きものあり、惜らくはその叙述の實情にのみ捉はれたるを憾みとす。

作者は序文に「花洛の遊民何之何氏拙者書」跋文に「我友何氏が考學のひま〳〵に當世男女の事をつらねて書たり」とありて、例の如くその誰なるを知らず、されどその書相畫風刊年の『朱雀遠目鏡』（延寶九年正月）、『同諸分鑑』（同年四月）と同じく、前者は評判記、後者は諸分を記せるに て共に遊女物なるに、その中間の三月に若女兩道の内幕を描寫せるは、或は同一人の所業ならん歟。右樣に對する考察は大方博雅によつて發明さるべきを期待するなり。

用語の「坪入、せちべん、あがり鯰、やほ介、瓢金」など、これ何れも花街語の參考となり、就中巻一の「大臣島原に來ての諸分」の條に「さて床入には枕元に香をくゆらし、床には上郎持參として、夫々の大臣の氣に合せて、或は繪贊墨跡古筆新筆のかけ物をかけ」とあるは、遊里の格式慣

例を記せる『色道大鏡』にも無き所にして、本書によつて始めてその習慣が會得さるゝなり。また巻三の野郎をいへる項に「又金剛に抱へられて、則主か金剛に成て人目には草履取の樣にあひしらひて、主に引廻されて歩行もあり、さて此草履取を金剛といふ事はうはむきは草履取かと思へば、かげにては傍輩の樣なる詞遣ひもあり、又主の如くなる體もあり、されば草履に似て草履に非ざる故金剛といふなり」とあるは、是又『難波立聞』（貞享三年版）にみゆる少年俳優が、小歌方に抱へられしものあるに徴して世相の裏面が知らる。また巻一の「都遊興ぞめきの品々」の條に「三官飴にたとへては、風味一流かはり者じやと嬉しがり」は、その頃流行せし唐人飴にて、當時來舶せる明人の行態に擬せる街頭商人をいひしなり、三官とは『活所備忘錄』巻廿八に「投化大明賤者以一官二官三官呼、猶如日本曰太郎二郎三郎也」とあり、併せて近松の『國性爺合戦』に老一官、和藤内三官などの人名あるをも考證すべし。

挿繪は各冊とも半丁のもの三面づゝを有し、その畫風『朱雀遠目鏡、同諸分鑑』に相似たり、何れも時代風俗の畫證とすべく。巻一の「大臣無性に露を打つ所」に遣手と亭主の表情を反對に描ける。巻三の「ぬれのてい」は、若き男女が手をとりて語らふ嬌態は、從來の劇畫においては曾て見ざる所のもの、これその脚本内容が、いかに寫實になりたるかを證するに充分なりとす。巻四の「嵯峨の茶屋」の店先に水風呂の畫けるも、驛路の旅宿とその營業狀態の何等異なる所なかりしもが察せらる。

（原本、東京、安田文庫藏）

當世かもじ雛形

半紙本　一冊

本書は、近世婦女結髪の形態を畫けるものにて、その序文に「實や女は髪のめでたからむこそ人のめたつべかめれ、大象もよくつながるゝとは吉田のなにがしも言置侍る、春は緑の柳髪より、夏は蟬翼燈籠鬢、秋は木葉の落髪や、かしらの雪とつもるまで、まさきのかづら長かもじ、絶えせぬ髪の品々を筆に寫して、女の一助ともなれかしと云爾、安永八年巳亥の春」とあるによりて、その著作の意圖が知らる。その著者に就ては、奥附に「右作者安部玉腕子洛東之住人而其名有模慮之雛形篇集全部一冊成普世流布事希而已」とあるは、たゞにその編輯者としてのみに非ずして、畫圖に筆を執りし人なるべけれど、その傳記詳かならず、僅に井上和雄氏の『浮世繪師傳』に本書の名を擧げ「其の畫風月岡雪鼎に相似たれば、或は雪鼎の門人ならむかとも思はる」と記せるを見るのみ、幸に博雅の士により、その傳記業績の明かなるを得ば幸甚なり。

中世以前はおいて言はず、江戸時代に入りて、婦女子の風俗は寛文前後に至りて著しく變化を來し、衣服裝身具の發達に伴ひて、必然に結髪の上にも進歩を見たり。所謂時世粧は、かの寛永風俗畫に見る如き、下け髪なるが多きに引替えて、髷に一段の工夫が加えられ、それへの美的補足として、鬢・髻（江戸にてタボといふ）が、生活の環境と年配に應して、多種多様となれり。

按ふに、上古中世は、婦女が外出するに當り、面をあらはすを耻らひ、道を行くに深き笠を戴きたり、「女子出門、必擁蔽其面」（禮記内則）が江戸時代にまでも及び、市女笠、塗笠、花笠、加賀笠等の外に、被衣、頭巾、綿帽子などが、婦女用具の一たりしにても知らる。かゝる故に結髪の技工は、左迄の進歩を見ざりしかど、ひとり遊女娼婦の輩は、既に兵庫髷、勝山髷、島田髷等に結ひなせしなり、これらのものは廓外に出づること稀れなると、その業態の然らしむる所に因れるなるべし。

然るに時世の推移は、萬般の器財にも變革を齎らして、江戸中期に至り、婦女扮裝の上に一線を劃したり、そは『賤のおだ巻』に「寶暦の始めより誰人か青き紙にて張たる日傘をさし始めて後は、女の菅笠はすたりて、今は女の笠をかぶると云事は絶てなし、近き頃の子どもらは、女の笠かぶりたる形は知るまじと思ふ位なり、元來帽子もすたりて、今は帽子かぶりて歩行女は一人もなし、梯押へも又すたりて誰もさすものなし、青傘は其頃ことの外流行て、今は（享和）すたれたれど猶殘れり、女の髪もそこねず、同身日を掩ふ故に、暑を避て甚よろし」とある如く、容色の美惡を左右する頭髪の結ひぶりは、婦女の最も留意する所なれば、その「頭髪をそこね」ざる日傘の現出は、實に婦人にとりて、天來の賜なりしならん（これに演劇の鬘の發達も考慮さる）。かゝりしより張鬢、高髷、長髻と一般に大形になり、そのために結髪用具、就中「入毛」にも種々のものが案出されたり。本書巻末の「つりはけ、つとうら、かたびん、まへがみ、中つりはけ、けしほん、中かもじ、びんみの、長かもじ、いれづと、びんづら、びんはり、さしつと、いかたかもじ」など、從來

よりありつらんものにも改良が加えられ、かく多數が擧げらる。

またその形を整ふるに、「たぶさし」「びんざし」など、鯨鬚、鼈甲にて作れるものを入れたり、本書「燈籠鬢」は、そを用ゐたるさまなり。その他これを助成するに、櫛、笄、簪等、謂ふ所の「あたまの物」が、金銀珠玉にて作りなされ、都邑至る所に小間物屋（裝身具、化粧品商）のありて、婦女の心をそゝれるは、風俗史上最も興味ある所なり。

結髪圖錄と稱すべきものは、江戸時代に入りて現出せしこと勿論なるが、貞享四年版『女用訓蒙圖彙』（本會第九期刊行）卷三に「下げ髪、御所風」以下九種を圖錄せり、その中には、前記の「島田曲、兵庫曲」も收められ、加藤曳尾庵の『我衣』にも圖示考證されたり。また元祿十一年版『三國舞臺鏡』、寛政十二年版『役者百人一首化粧鑑』にも見ゆれど、前者は婦女躾草にて、そが卷中に若干圖錄されたるのみなるも、正確なる畫證として推重すべし。後者は劇書にて、即ち演劇用の「かつら」を主とせるものなれば、正しき結髪の變化を知るには、隔靴搔痒の感なきに非ず。然るに本書に至りては、全卷二十二圖の多きに亘り、悉く當世風を描き、享保以降の文獻圖畫を考究するに、最も重んずべき資料なりとす。殊に名稱を部分的に書き記せるは、恐らく江戸時代唯一のものなるべし。いまその名稱を列記せんに、

中なでびん、かもめつと、兩手わげ。
中なてびん、花びしつと、まるわげ。

せきれいつと、なげ島田わげ。
かつ山びん、合せつと、うつほ兵庫髷。
きんしやう〳〵鬢、うつせみわげ。
中びん、ひしつと、よこ兵庫。
すゞめびん、小まん島田わげ。
張出し繻子びん、腰折島田わげ。
中なでびん、かせわげ。
燈籠鬢、そぎつと、さゑた島田髷。
山形くり鬢、そぎつと、結び立兵庫。
中なでびん、かもめつと、かたわげ。
すゝきびん、おとしはらけつと、きりすみ島田。
蛤びん、つりふね兵庫髷。
うつをさきかうがひ髷。
吾妻びん、かひなでつと、茶筌わげ。
とうしかみ、けしわげ。
くりびん、けしつと、うつをさきかうがひ。

ふかしびん、三つつと、しのぶわげ。
すきあけ髪、ごたひづけ。
羽二重びん、せきれいつと、兵庫髷。
くるまびん、ばいわげ。
下なでびん、なげ島田わげ。
桔梗びん、すゝめつと、ぬき出し島田わげ。
くし巻きのはらけがみ。

等なり。以上の髪形ちは、例へば「中なで髪」「かもめつと」を基本として、これに「兩手わげ」又は「かせわげ」を加ふれば、年若き婦人にふさわしく。更に「中なでびん、かもめつと」をそのままに「かたわげ」となれば、年増女に相應するなど、髪と髷と髻の三つが要素となりて、こゝに千變萬化の麗はしき髮形ちとなること、この一冊子を以てして、江戸中期以後における、美容術の進歩の跡を見るに充分なるものとす。

攝州兵庫港の遊女が結び始めしといふ「兵庫髷」にも「立兵庫、うつぼ兵庫、横兵庫、舟兵庫」の數種あり、東海道島田宿の女に出でし「島田髷」にも「なげ島田、小まん島田、腰折島田、さゑた島田、きりすみ島田、ぬきだし島田」等、それ〴〵形を異にせり。これら前出の如く、その人物年格好によりて、甲の形が乙にも丙にも應用され、幸いてその婦人の心柄の美醜すらも忖度さるゝ

なり。

その上に、本書は婦人の上半身を畫き、それが折鶴または玉章を手にせる女、文箱或は團扇をもてる女、香箱をもちし少女、香を聞く妓女など、左顧右眄せる構圖は、たゞに美髮圖錄たるに止まらず、上方にをける美人畫譜としても、優越の地位に置かるべきものなり。

本書原本は竪七寸四分、横五寸二分、全卷十五丁（内序文、奥附各一丁）にて、さきに『日本風俗圖繪』（大正四年版）第十一輯に收載されたれど、所謂叢書中の一部なると、大正癸亥大變前の刊行なれば、世間流布の數も減じをることを顧慮して、いま江戸中期風俗書の一として、新たにこれを精刻し、以てその眞を傳へ、諸家の參考に資せんとするものなり。

（原本、津、川喜田久太夫氏藏）

（名古屋の尾崎久彌氏より本書につき、同氏藏本と日本風俗圖繪收載本と、本會複製本の三種異同を比較對照されて、左の一文を卷末附載の分と一所に寄せられたるを以て、便宜上こゝに附載してその厚意を謝す）

『當世かもじ雛形』のことである。之は、家藏本と複製本と違ふところの多いことである。

『日本風俗圖繪』第十一輯所載本と、家藏本（原本）と、複製會複製本と三種を較べると、家藏本は日本風俗圖繪本と似て、複製會本とは異る。

家藏本は、序一、本文一より十三、次ぎ裏白一丁を裏表紙に貼る。此の裏白一丁とは、右作者

云々の三行と年代版元名のある部分である。從つて序とも十四丁半。即ち丁數は、大體複製會本と同じであるが、本文第十三丁目も表裏とも美人の半身像で、複製會本第十三丁の鬢、かもじなどの標本表裏で十二劃を爲すは無いのである。さうして、丁數の打ち方は、序は丁を打たず、本文一より裏の綴ぢ目下に一、……十二、十三と、以上各丁美人半身と略解文字とで、次が裏表紙に貼つた一丁なのである。然るに複製會本は、表裏十二劃の一丁を十三と打つてゐる。是れ、又十三と無い限り、十三が繪（美人の表裏）のものと標本（十二劃）のものと、第十三丁だけが違つた本が二種ある譯である。

次に、一より十二に於ても、下部の美人は全く同版であつても、上掲の文字が、をり〳〵違ふ。第五丁表の「そきつと」（複製會本）が「源八つと」（家藏本）とあり、第五丁裏の「そきつと」之も「源八つと」とあり、第七丁表の「はまくり」（複）は「丸やま」（家）であり、その同じ第七丁表の終り「ひやうこわけ」は、「わけ」とだけあつて、ひやうこの四字はない。中間のひんつりふねの字の配りから見て、家藏本の版木に手入れしたのが、複製會底本と見られる。第七丁裏は、表の反對で、家藏本は、「うは なて ひし つと さき かう かひ」と七行以上に散らしてある。複製會本では、之を「うつ を さき かう かひ わけ」と散らしてゐる。第九丁表「うつを」（複）は「うつほ」（家）とある。第十二丁表「ぬきたし」（複）は「かしまや」（家）とある。

さうして第十三丁表は、「すゝめひんかりかねつと」で、繪は、編笠の若衆。第十三丁裏は、「かいわりなつとかたハすしかうかひわけ」で、年增女のむかう向きの姿である。

さて『日本風俗圖繪』本の方であるが、之は小生藏原本と第十三丁目まで全く同じい。唯之には、複製會本にあるが如き十二劃（表裏）の標本が附いてゐることである。即ち『日本風俗圖繪』本は、家藏本の序一、本文十三の外に標本一、それから見返しの裏白一丁と、以上である。つまり家藏本の全部に、複製會本の第十三丁といふ標本一丁を足したものが、『日本風俗圖繪』本である。注意することは、各丁上部の略解文字は、『日本風俗圖繪』本と家藏本とは、全く同じ文字、即ち同版であることだ。

さて『日本風俗圖繪』の原本は、標本の一丁分がある異本が他にあつて、之が無いのを落丁と誤解して、故意に校訂者が附足したものか、又は又十三の意味で、もと〳〵餘分に入れた本かと思ふ。解題には、その邊の事は、何とも書いてない。（風俗圖繪本は、丁數の打ち方も不明である）唯、此の標本一丁あるものが十三とあつて、別本（家藏本）の十三に代り、且つ此の標本一丁あるもの（複製會本）が、ところ〳〵各丁の上部文字に修正のあるところより見て、此の標本あるもの、後摺修正本であらうと思ふ。とにかく二本又は二本以上、異同のあることは、これで知れよう。

家藏本表紙は、やゝ分厚い濃い藍のつや〳〵した表紙で、題簽は左上でなく、中央に貼る、紅

唐紙のやうな色してゐることは、複製會本の通り、但しあれより濃い。書體全く同じ、同一版木である。寸法は、横に於て五寸三分（複製會底本は五寸二分）、竪は複製會底本と同じく七寸四分である。

江戸名所記

大本　七冊

本書は江戸における最初の名所記にして、その體樣は、本會同人故和田萬吉博士の著『古版地誌解題』にも、「著者（無署名）の自序一張あり、同好の友と倶に江戸府内並に附近の名所を巡覽せんとて出立つ由を述べたる小引あり、毎卷目次あり、記載の序次は方向に依りたる處と、さもあらぬ處とありて、往昔府内府外交互出入甚しき部もあり、本書々中に著者の名を著さずと雖も、所々に『東海道名所記』を自著として引けるにて、淺井了意の作なることを推斷すべし。記述の方法は府内及近郊の社寺並に遊覽地を主とし、社寺に就きては、例の緣起を擧ぐること多し、故跡舊地の記載には、往々牽强附會の俗說もあり、又傳說を聞謬りたるが如き節も少からずと雖も、遊覽地の狀況を寫せるにあたりては、遺に例の活潑々地の筆致を見るべし」と記し、次て「卷中毎項著者の狂歌を挿みたり、然れども概ね頗作卽興に過ぎざるは『東海道名所記』のそれ等と齊しく取立てゝ秀逸と稱すべき程のもの無し」とあるを以て、本書成立の大概を知るべし。是より先き、江戸に關する地誌の一類として『慶長見聞集』『あづまめぐり』を擧くべきも、前者は江戸開創當時の狀況

を記せるもの、後者は自己の目睹せる所のみを書けるものにて、寧ろ風俗書として貴ぶべく、純粹の地誌としては、まさに本書を以てその嚆矢とすべし。

本書の著者は『東海道名所記』を作れる淺井了意なることは、『古版地誌解題』にも、本書第七「吉原」の條下に、「そのかみ東海道の道中記を編ける時に粗しるしつけ侍べりければ今又かさねていはんは老言ならずや」とあり、また第四の「禰宜町歌舞妓」の條にも、「それ歌舞妓の根元は東海道名所記にしるし侍べればかさねていふも老言に似たり」と記せるにて、毫も疑ふの餘地無かるべし。了意はもと江戸の人にて、明暦大火の後、京に上りて著述に從ひしといへば、萬治初年の『東海道名所記』も、同四年の『武藏鐙』（明暦大火の事を記す）も、ともにその見聞にかゝれるものなれば、本書と共に實錄として重んずべきものなり。

按ふに、本書著作の動機は、萬治年間に版行せる『京童』『鎌倉物語』等の名所案内記に倣ひしは肯がはるれど、その眞因は、かの『東海道名所記』の名所案内と、旅行用心記を兼ねたるに反し、著者の出自なる江戸が、明暦災後全く復興して、昔日にまさるの觀を呈したるを紹介するの意味にて執筆せしならん。さればこそ、その卷頭に武藏國號の由來を記して、他國にまさる歷史を有するを誇示し、次に「江戸城」の條に、「江城すでに日に從ひ、月を追て歲を重ねるに、ます〳〵繁昌し、諸國の大名小名靡き從ふ事は、吹風に草ののえふすが如く、日本國の諸人入り集りて市をなせり」と、幕府威令の嚴なると、商工輻湊の都市なるを記せるは、他の名所記に無き所なり。『古版地

誌解題』に「然れども大體より言へば、本書は『東海道名所記』に比して活氣乏しきを覺ゆ、但此は開創日猶淺き江戸に、舊地として來歴に富める處少なかりし時代の著述なれば止むを得ざる趣もあるべし」と記せど、著者の意圖は名所舊跡案内記に假托して、新興の大江戸を描寫するにあり。卷中の「日本橋、三つ俣、禰宜町、吉原」等の記述の大袈裟なるも、必竟は『東海道名所記』の、江戸城の結構を說けるに、碧瓦丹楹なりし明暦以前の壯觀を記せるに共通せり。本書「廻向院」の條の、明暦災禍の甚大なるを述べたる反面に、家屋櫛比人口稠密の江戸なればこそ、その被害の夥多なりしとの意を含ませしならん。後來の名所記は、單に遊覽客のために編述せられたるもの多しと雖も、その當初は、『京童』以下『盧分船』、南都名所集、河内名所鑑』等、何れも本書序文の所謂「名所おほき江戸まはりを廻りて見ん年月こゝに住みながら知らぬ人に尋ねられてそこは見ず爰は知らずと答へんもをこがましかるべし」と用意を同うし、必竟その鄕土愛より出でたるものなりと考へらる。

また考古の料としては、後世に至りて亡びたる社寺の所在及び景觀と、當時の民間信仰、例へば神木、願懸の如き是なり。その他江戸の名物として傳來久しき沿革をも、本書によりて知ることを得るなど、當期の事物は畫證と相俟ちて、蓋し發明する所多かるべし。

本書原本は竪八寸六分、横六寸、全七卷にて、卷一は三十二丁（内、序目錄二丁、最終葉に「三十一」とあれど、十六丁目に「又十五」、二十九丁目に「又廿八」とあり）、卷二は三十七丁（終葉

に「三十八」とあれど、十四丁目に「十三十四」、二十四丁目に「廿四五」とあり）、卷三は三十三丁、卷四は三十一丁、卷五は二十四丁、卷六は二十六丁、卷七は二十九丁（卷二以下毎冊目錄一丁づゝあり）。項目は卷一、卷二の兩冊に各十五、卷三に十四、卷四に七、卷五、卷六に各十、卷七に九を算し、挿繪もまた各項に一圖づゝを有せり。その行文は平假名交りにて、當期の假名草子と體樣を同ふせり。

本書著作年代は、卷四「禰宜町歌舞妓」の條に「しかも去年寛文元年都の四條河原には若衆歌舞妓女形は跡をけづられて法度になれり」。卷五の「西應寺」の條下に「今寛文二年みづのえ寅にいたる春秋二百九十五年をへたり」とあると、卷末刊記の

寛文二暦壬寅五月日

板本五條寺町

河野道清

とが一致せるにて知るべし。しかも江戸の名所記を出版するに、なほこれを京都の書肆に仰ぎたる事實は、淨瑠璃本、評判記等にも見る所にて、この頃の江戸文運の未だ盛んならざるを證するものなり。了意の著作は、寛文と元祿の書籍目錄を綜合して、萬治寛文年間に約三十種が數へられ、その中に佛書和書醫書等、小說以外のものもあり。本書はその數ある作中、最も廣く知られ、既に『續々群書類從』『大日本地誌大系』に收めあれど、或はその挿繪を略し、或は活刷なるため、魯魚

の誤りなきに非ず、これ今期複製提供せる所以なり。

挿繪の畫風は『東海道名所記』に比して、筆致に素朴の觀あれど、却て畫面の緻密なるは、山河田園の勝に非ずして、社寺殿堂の景觀を克明に描出せるためなり。然れども本書は上方版なれば、その構圖は著者の指導によりて成され、點出の人物は被衣、或は市女笠を被れる婦人など、京風俗のそれにて、江戸の實際に遠き所無きにしもあらず。この頃は肉筆と版本とを問はず、畫家の署名なきを例とするにて、その誰なるを知るに由なし。江戸にては菱川師宣以後、往々その名を記せど上方にては、後來の浮世草子に至りても、この因習を赴へること周知の如し。

著者了意は佛家の徒なるを以て、その著作にも間々、因果應報の理を示し、教導訓誡の言を以せり。本書卷四の「禰宜町」の條の如きは、淨瑠璃、歌舞伎の叙述こそ『東海道名所記』と同巧異曲なれ、一ト度男色流行の弊を畢ぐるや、當時『野郎虫』といへる評書まで出で、世人のこれに耽溺する狀を記し、殊に緇林の徒に對して、「諸寺の高僧貴僧その外諸檀林の所化衆をの〳〵この少年に浮かされ惑ひて行通ひ、一座參會の望みをかけその姿を見る毎には三尊來迎の思ひをなし、その本意を遂ぐる時は龍門の鯉の三級の瀧に登れる心地して猶飽足らねば又は行き〳〵て終には揚錢に事をかき經論聖教を賣代なし佛具袈裟を質におき寺院年來の什物までも盗出し持運び千歳の契りの追從に若衆達に參らせ上るこれによつて浮名を流し德を損ざし永く逐電の身と成果るこそ悲しけれ」と痛罵せり。これ同人著の『堪忍記』に、武家を主體として忍耐の貴きことを訓誨せしと、

『浮世物語』に、世俗の輕佻浮華を諷諫したると同じく、言を名所記に寄せて、その反省を促したるやに思はれ、こゝに著者の教訓的作家たる本領が窺知せらる。

本書は初刊以來、幾度か摺刷したること想像さるれど、歳月相距れる寛政文化度において既に稀少となりし事は、當時一流の作者たる山東京傳すら本書を藏弆せず、同友の曲亭馬琴より借覽せる自筆の書簡現に米山堂に藏せり、その文に、

雪後別而寒氣相增候得共益御康健御座被遊恭悦奉存候然者度々御藏本拜借わつらはしく相願恐入奉存候今日江戸名所記合本四册返上仕候御落手被遊可被下候千萬忝難謝盡奉存候此間寒氣にいたみ罷在候間委曲御禮申上兼候萬々後便可申上候　頓首々々　再拜

十一月十一日　　京　傳

曲亭先生

とあり、文辭の叮嚀なるはその謝意を表して餘りあり。今回對校に使用せる原本は、この曲亭本にて、毎册「曲亭文庫」「曲亭藏本」（以上朱印）「瀧澤」（黑印）の印あり。百年の後、測らずもこの二大家觸手のものによりて刊行する事を得たるは、顧みてその文緣の淺からざるに、感激を覺へざるを得ず。

（原本、東京、安田文庫藏）

東叡山名所

大本　一册

江戸幕府三百年の基を開きたる一世の英傑德川家康の帷幄に參し、所謂關東の懷刀として、本多正信と雙稱されたる南光坊天海は、幕命により江戸城鎭護のため、比叡山に倣ひて堂塔伽藍を造立すべく、元和の末に地を上野に賜ひ、寛永の初め落成せる本坊を中心として、常行堂、法華堂、經藏、多寶塔、三十番神堂、仁王門、東照宮に次で、鐘樓、清水堂、五重塔、大佛、祇園堂等成就し、これを東叡山寛永寺圓頓院と號けたり。更に寛文、延寶に至り、境域の擴張と諸堂子院の增設を行ひ、加ふるに三代將軍家光の廟所建立せられ、碧瓦丹楹の建築は、松柏枝を交ゆる自然の風致と相映じ、これに櫻樹を植添えたれば、春風駘蕩の候は言はずもがな、四季折々の風物に、都人踵を接し、新興都市の名所として、將又江戸市民が自慢の一つなりしなり。本書はその宏壯なる規模を誇示するの意圖に畫作せられたるものにて、その序文に「遠國波濤の住居の身は、昔にのみして目に見ねば、其風景を繪に寫し、人目稀なる山がつの賤の男賤の女にも施さば、居ながら名所を見る心地せんと、その所々に斷り書を書附るなり」とあり。

筆者は款記こそ無けれ、當代の巨匠菱川師宣の作と認めらる。序文の「斷り書」卽ち頭書に、その場々々を面白く書記せり。內容はまづ湯島天神より不忍辨天に詣で、黑門、櫻馬場より、ゆくゆく大佛前より淸水觀音堂に登り、遠く東海の歸帆を眺め、西に高く富嶽を望みて、その景勝を稱へ。更に花見幕打渡して歌舞宴飮するさま、若衆美婦の花下逍遙を圖す、なほ山內奧深く分行きて、輪王寺宮御座所の門前に到り、莊嚴なる結構に眼を驚かし、頭書の所謂「殊勝さも肝に銘じておもほゆる程に、花の下に歸らん事をぞ忘れける」にて終れり。

本書原本は竪八寸六分、橫六寸、全卷十六丁（內序文半丁、跋半丁）なるが、惜むらくは第六丁脫落せり。また本書の名稱は題簽も表紙も亡佚せるため、後人が假題せるものにて、他に類本あるを知らざる故 已むを得ずこれを襲ぎて『東叡山名所』と命けたり。卷末に「天和二壬戌歲二月吉日三河屋七右衞門開板」とあるにて、東都名勝たる上野を如實に描寫せる最初のものと思惟せらる。是より先き畫文相雜れる『東海道名所記』『江戸名所記』等々、一國一鄕の名所舊蹟を書けるものは寛文延寶間には數多く刊行され、本書の筆者たる師宣にも、延寶六年の『奈良名所八重櫻』の作もあれど、繪本として一地區の景觀を多樣に畫けるものは、當期において本書の外これ無かるべし。尤も延寶六年『吉原戀の道引』もあれど、こは刊行の意義において根本の相違あれば、こゝには取らず。殊に本書跋文に、此下卷に武江の名所々々を書記し、此上卷（本書）に竝べんと」せるは、上野の地が名所として、いかに江戸市民に重ぜられしかゞ察せらる。蓋しその頃は櫻ケ岡（今の西鄕銅像所在地一帶）に聖堂と林家の弘文院ありしが、元祿の擴張にて湯島に移り、次て瑠璃殿（中堂）の落慶ありて、こゝに一大完成を見るまでの狀況は、本書によつて始めて窺はるゝなり。しかく輪奐の美を極めたる堂塔も、明治の初め彰義隊の變によりて、その大部分が燒失し、同六年諸種の設備を施して公園となり、以て今日に至れり。

上述の如く、本書は天和期の東叡山資料として屈竟のものたるを以て、卷中所載の堂塔その他に

就き、聊か記す所あるべし。

〔黒門〕 上野山内の南部にある表慈門にて、木造黒塗なるよりかく呼ばれたり。元祿以後道路改正につれて、仁王門と并建てられしが、數度の火災に燒失し、其都度建造されたるが、明治六年公園となるにより、大佛の後方に移され、同四十年更に三の輪圓通寺に移されたり。

〔櫻の馬場〕 は『紫の一本』卷上に「黒門を入てより、櫻の並木の馬場二町餘有、西の方はしのばずの池のはたより、天神山梅檀木林へつゞきよく見ゆる、限りなき眺望なり。それより二王門なり」とあり。また書名不詳の俳書に「上野に花見にまかれるに如何なる折にか番の者ども守り居て黒門より内へ入ざりければ、しばらくやすらひ櫻の馬場を見やり、獨ごちに、せめて見せよ櫻の馬場の花盛り 蝶々子」とあるにて、その位置を知るべし。これ卽ち今の上野公園の入口より帝室博物館に通ずる道路の謂にて、東に櫻ケ岡を負ひ、春時白雲の靉靆たるを觀ること今も昔も同じ。この櫻ケ岡といへるも元祿十一年以後のことにて、そのかみは櫻が峯と言ひしなり、そは寛永七年林羅山がこゝに別墅の地を賜ひ、聖堂の外に塾舍を建て、これを櫻峯塾と名けたり、また羅山が羅浮山人と號せるも「羅浮山有櫻桃峯」の句より取りしなりといふ。元祿四年湯島に移轉せるは前出の如くなれど、この邊の櫻樹は羅山が栽たるものなること、その子春齋の『鵞峯文集』に見えたり。

〔仁王門〕 本書頭書に「さて仁王門の邊を見れば下馬札あり」とあれど、惜むらくは落丁にてその圖を見る能ず。これは菱川師宣畫「江戸物參體」（一枚繪、『浮世繪藝術』昭和九年九月號所載）

に、二王門と題せる圖ありて、その側に下馬札あるを以てその大概が知らる、この門は下總古河城主永井信濃守尙政の建てしものにて、その位置は大佛の東南、摺鉢山の西方の道路上に當れり、その後元祿十一年文殊樓建立のため、山の入口なる黒門に東隣して建てらる、本書の分は實にその第一次のものなり。

〔大佛〕 は文殊樓西脇の丘上にありしものにて、寛永八年堀左京亮直寄が泥土を以て丈六の釋迦像を造りしが、正保四年の地震に顚落せるを、明暦萬治の頃に木食淨雲が勸進して、二丈二尺の金銅釋迦像を造立せしが、卽ち本書所載のものなり。その頃は露佛なりしを元祿に入り、輪王寺宮公辨法親王が佛殿を建立し、爾來堂宇の内に納められしかど、天保十二年十一月晦出火、堂内の諸佛悉く燒失せるが、同十四年復舊す、下りて明治六年公園設置の際堂宇取毀されて、再び雨露に曝さるゝに至り、遂に大正癸亥震災に大破せしを、全部改鑄の意にて廢毀せられしが、企劃豫期の如く運行せずに、その跡今なほ板圍の儘となり居れり。

〔淸水堂〕 は天海大僧正が摺鉢山に建立せるものにて、是よりさき太田道灌が勸請せる五條天神社ありしを、寛永八年東叡山門前地に遷座し、そのあとに京都淸水の觀音堂に倣ひて、南方に舞臺を懸出し、主馬判官盛久の守本尊千手觀音を安置せり、本書は實にその摺鉢山時代のものにて、本書頭書の如く眺望の絶佳なることは『紫の一本』卷下に「淸水の舞臺に休らひ、花見て暮す春ぞすくなきなどゝ、古き事を思ひ出して詠居たる」とある是なり。のち元祿十一年に櫻ケ岡、卽ち現在

の地に移り、安永七年改築せるが今の建物にて、安政地震、上野戰爭、大正震災にも事無きを得て、ありし昔の姿を殘しおれり。本書はその移轉前の位置なれば、現在の位地と矛盾せるもこの故なり。

〔九重塔〕 は恐らく五重塔の誤りなるべし。同塔は寛永八年に土井大炊頭利勝が奉建せるが、同十六年燒失し、その後間もなく御大工棟梁甲良豐後守宗廣父子によりて建造せられたるがそれにて、東京における最古の塔なると、その形狀の優秀なることにおいて、特別保護建造物に編入せられ、現存せり。また圖中の建物は「輪藏」なること、寛永寺藏『慈眼大師繪卷』所載のものと、その位地形式を同ふせるにて知らる。

〔釋迦堂〕 頭書にある同堂は子院護國院にあるものにて、寛永七年落成し、その後靈廟設置のため數次移動せるが、享保二年池魚の災にかゝり、同七年再建せり。これ卽ち現今のものにて、頭書にある如く順禮が納札するなどは、思ひも寄らぬことにて、この一條は當時の笑話を挿入せるものなるべし。

〔不動院〕 本書頭書に「觀音堂の邊を見てあれば、築山のその上に棧敷を構へ、不動院の寺内より色々持運びて、花見の興を催しける」とあるは、これまた「普門院」の誤なるべし。摺鉢山に淸水堂のありし頃は、その西南前に子院普門院あり、同院は始め慈眼院といひ、淸水堂の本尊を洛東淸水寺の僧義房が天海に呈したる緣故により、その子秀海を開祖として淸水堂の別當たらしめたり。その後慶安元年に天海の諡號慈眼大師を諱んで普門院と改め、元祿十一年淸水堂移轉の際、その南隣なる壽昌院と共に、下寺（今の上野驛とその鐵道線路）に移されたり。寛永寺の子院は寶永に至りて三十六坊となり、明治初まで存續し、その後廢合せられても、なほ二十三宇を殘せるが中に、「不動院」の寺號を見ず。いま淸水堂附近の狀勢を考察して、その過誤なるべきを信ず。

〔御廟門〕 は大猷院（三代家光）の廟所御門の謂なり。慶安四年家光の薨ずるや、今の帝室博物館構内の東南部卽ち兩大師堂寄りにある護國院、林光院を、本坊の後方に移したる跡に營み、翌五年靈殿落成し、勅額に後水尾天皇の宸筆を賜りたるものにて、（家光の遺骸は日光山に葬れり）享保度に全部燒失せる後は、四代將軍靈廟に相殿として祭祀するに至れるなり。

〔宮樣の御座所〕 とは御本坊卽ち輪王寺宮のおはす所にて、現に東京帝室博物館所在地なり。寛永の初め天海大僧正が寛永寺開創に當り、門跡地とせん事を冀ひ、同十五年幕府の奏請によりて、後水尾天皇第二皇子守澄法親王東下せられ、明曆元年十一月輪王寺宮の號を賜れり。寛永寺門主としての第一世天海、第二世公海は、共に人臣の出なれども、第三世より皇族を仰ぎ、自宗他門の上に陰然として重きをなしをれり。本書刊行の頃は第四世（輪王寺宮第二世）天眞法親王御在職中に屬す。最後の第十五世公現法親王は、後の北白川宮能久親王なること周知の如し。

また頭書の記事と共に、風俗の畫證として見るべきもの頗る多し、黑門を入る大名行列を記して「六尺豐かの徒士に對の羽織を着せ給ひ、はつぱ花かいらぎの大小、おのれ〳〵が丈と等しきをほ

つ込んで、眞先に二人に竝び十四五人およがせ、中間小者に至るまで、作り髭を面一杯に塗り廻し、足拍子を揃へてばつた〳〵と八文字を蹈ませし」とあるは、遊女の道中姿、殊に奴風にこれらの影響が多分にありしこと肯はる。大佛前における「熊谷笠によしや風」の武士は、脱落せる六丁目にあれば見る能はざれど、寛濶なる面影は考へらる。清水堂石水盤の側を歩める小者が餘情杖を肩にし、着衣に「花」の字を附せるは、判じ物模様の一部を示せるにて、例の鎌わぬ、斧琴菊などの一類なるべし。花見幕の内にありて、琴三味線に尺八を合奏せるは、元祿十二年版『紙鳶』にもあれど、それより十數年前刊行の本書に見るを珍とす。小性姿の艶麗なるに「上着には何にも唐綾の白地に、墨書にて四季折々の景を、物の上手の書いたれば」とあるは、かの書繪小袖にて、『椀久物語』『諸艶大鑑』『西鶴織留』等、上方出版の諸本に見らるれど、江戸版の本書にもあるにて、その流行せるが知らる。「影衆」即ち芝居町の色若衆を伴ひて遊樂せるさまは、晋其角が村山万三郎を具して此所に遊び「この花にあるきながらや小盞」の句あるを考ふべし。主人が蹴鞠に耽るを待つ間の供人が、塀外にて毛抜を操り髭をぬき、或は手を擧げて欠伸するさまは、その塀を斜めに描ける構圖と共に、傳土佐長隆筆の蹴鞠圖屏風（根津嘉一郎氏藏）とその意匠を一にせるも一興なり。

また言語の上より觀て頭書に自己を指して「へびじい」（二丁裏。五丁表）と言へるは、當期の評判記等にも見られ。「若い衆の眦をこらし給ふはことはりだ」と俗語をそのまゝに記す。五丁裏のそれは、俗謠の「咲いた櫻になぜ駒繋ぐ駒が勇めば花が散る」の意をほのめかせり。九丁表の末に

「やつちやあ、どふも申されぬ」は褒め詞にて、江戸にては早く絶えたれど、大坂は天明頃迄も行はれたるもの〻如し。前出の十二丁裏、十三丁表の洛陽の田舍人の話は、當時の笑話を取入れたるにて、眼福を得る外に耳にも面白く訴へんとせる作者の用意が知られ、簡潔なる行文の中に、無量の含蓄あるを看取すべし。

更に本書所載の人物風俗とその筆致が、菱川師宣筆の『江戸物參體』と、心匠を一にせるは、牽て本書筆者の認定に、充分の裏書を與ふるものなり、その上に稀少なる元祿以前の東叡山資料に、かゝる貴重書を加え得たるに止まらず、都市美研究にも、時代風俗參考にも、頗る重要なるものなり。

なほ本書原本の複製につき川瀨一馬氏の恩賴を得、本編執筆に當り玉林晴朗氏の示教に負ふ所多かりしを謝するものなり。

（原本、東京文理科大學附屬圖書館藏）

ねごと草　大本　二冊

わが邦の小說文學は、遠く平安朝の『竹取物語』『伊勢物語』より、下りて『宇津保物語』『源氏物語』等に源を發し、鎌倉時代に至り、支那文學の影響をうけ、聊か異色あるものも出てたれど、その多くは貴族上流の戀愛關係を主題とせるものなり。室町期に入りても、なほ前代の形態を蹈襲し、僅に大江山、浦島、辨慶等を取扱へるもの出てたるも、いづれも筆寫に成れる繪卷物乃至草子

にて、廣く民間に流布するに至らざりき。その後奈良繪本發生したりと雖も、これ又依然として上流生活を描寫したるのみにて、所謂戀愛文學は、一部階級の人々に壟斷されたるの觀ありしなり。元和偃武後の江戸時代は、出版事業の整備により、上代文學を始め、近著の假名草子が數多く版行され、民衆讀物への接近を圖りたれど、讀者の地位環境と時世は未だこれを迎ふるの餘裕なく、漸く天和二年に井原西鶴が『好色一代男』を著して、こゝに浮世草子卽ち平民文學の世界を實現せり。蓋し凡百の事象は突如として出るものにあらず、寛永期の『十二段草子』『薄雪物語』『薄雲物語』の一類が、語り物として將又讀物として數次の版行を重ね、明暦萬治年間に、實在の遊女野郎を禮讃せる評判記出て、これら舊刻新版の交錯せる過渡期に、庶民階級に取材せるもの醞釀されたり。本書は實にその一にして　文脈こそ假名草子の轍を蹈めど、その素材は次期の浮世草子への橋渡しとして、重要なる役目を果しをれるなり。

本書刊記は、卷末に「寛文二年寅霜月吉日」とあり、恐らく京版なるべし。原本寸法は竪八寸五分、横五寸六分、上下二冊に分れ、上卷廿四丁、下卷十九丁。挿繪は上下兩冊とも、半丁のもの各九面を有せり。さきに『繪入本百種』（昭和二年七月版）に、本書下卷表紙及び奥附とその第七圖が縮寫掲載されたる外、他に飜刻あるを聞かず。殊に大田蜀山人の舊藏にて、『南畝文庫藏書目』卷三「祕史奇書」の中に見る所のものにて、下卷の末に「文化十二年乙亥仲秋於万笈堂收得杏花園印」と手識せるは、その稀覯なると共に一層の懷しみを覺えしむ。

その内容は、三河國吉田の邊りに住める與助といへる者が、竹馬の友金内と共に、同國赤岩寺へ花見の途にて、美目麗はしき姫に出會ひ、お定まりの戀風身に泌み、金内を脇役に、姫の宿所なる遠州白菅まで慕ひ行く道行振りに、沿道の名所名物、さては老女を點景として、纒綿たる情緒を唆らしむ。かくて白菅の宿りに到りし與助は、召使の女に囑して艶書を贈り、トヾ姫の情けにあづかり、月の光りの薄れ行きて、後朝の別れに聞く遠寺の鐘聲に目覺れば、身はもとの柴の庵にあり、袂に殘る香はなくて、たゞ松籟の颯々たるを聽くのみといふに終れり。

右は與助の在所を三河に取り、姫の宿にて管絃の音を立聞き、玉章を贈答するなど、かの『十二段草子』に負ふ所多きものゝ如し。また姫が想夫戀の曲を奏づるは、「謠曲」の『小督』に暗示を得たるなり。殊に與助が書送る文の七五調なるとは、姫の返書の韻文なるは、女子用文の手本にとの作意にて、これも寛文元年版の『錦木』に依據せるならん。當期の作者には、鈴木正三、山岡元隣、中川喜雲、野々口立圃、淺井了意等ありて、各々特色ある著述あり。本書の構想は、中世以降の紋切型にて　格別新味ある作品ならねば、それらの人の手に成りしとは思はねど、その主人公に與助なる田舍漢を以てす、華やかなる都會を避けて、わざと草深き場面を採れるは、これ平民文學へ轉進せんとする傾向を示すものと謂つべし。

『繪入本百種』解題に「澤庵禪師の詩歌を引きたれば、左まで古きものにあらず」とあり、同禪師は正保二年に示寂しをれば、本書の刊行より溯ること約二十年なり。それよりも本書上卷の松風を

評して「昔の美人は申に及ばず、今の世に持囃す花の都におやまの君、武藏の國に聞えて美しき、みめよし原の勝山や、なほも吉田の御姿をたぐひあらじ」といへるこそ、本書著作年時を考ふるの料なるべし。遊女勝山は、世に丹前勝山といはれ、もと丹前風呂の湯女なりしが、その風姿の豐かなること拔群なりしより、所謂「勝山風」なるもの此人に起れり。本書刊行の寛文初年はその全盛時にて、延寶六年に歿せる（名人忌辰錄による）半井卜養の狂歌に「御佛が三國一ぢや得申まい美女勝山は借錢のたね」と詠ぜしにても知らる。その他諸書にその嬌名を記せど、やがて退廓せることは、延寶三年版の『吉原大雜書』（本會第一期刊行）に「山もと（うち）かつ山目鼻立じんじやうに美麗なるかたぎなり、されど目元しほらし過ぎて八まん下卑たり（中略）勝山と名をまいらせしは、古への丹前勝山が名を付て、山本の家に傳ふあたら名を付たり」とあり、これその二世なるにて知らる、この故に抱主新吉原新町の山本芳潤家には大切の名となりし程なりき。さればその名京坂にも響き、さてこそこゝに取入たるにて、本書は草案脫稿後間も無く版行されたるならん。

なほ挿繪の畫風は、明暦四年版の『京童』系統に屬し、筆勢勁俊なる中に優雅の趣きあり。しかしてその上卷第八圖は、本書第八期刊行の『物くさ太郎』上卷の第五圖と同工なり。同書は江戸松會版にて、本會解說に「下卷奥附に寛文五乙巳年六月吉日、その左下端に一劃を附して、松會開板とあれど、その書體生硬にして頗る本文と相似せず、或は上方本を覆刻せるものに、書肆名を改竄發行せしや」と疑問符を附し置きしに、いま本書と對比して、『物草太郎』が本書の挿繪を利用したる上方本なりしを、更に松會が再刻したりとの念を確保せしむるに至れり。これらの江戸版が、新進の畫人菱川師宣の心匠に、いかほどの影響を與へしやは測知するに難からず。かゝる所にも本書の價値が認めらる。本書が徒らに天下一本なるが故に複製するにあらず。稀書にしてしかも貴重なるを以て、玆に提供する所以をも、深く認識せらるべし。

（原本、京都帝國大學附屬圖書館藏）

元のもくあみ物語

大本　二冊

本書原本は竪八寸九分半、横六寸二分、上下二冊より成り、上卷は十五丁、下卷十三丁、柱記に「あみ上（下）」と刻し、下卷卷末に「延寶八年申九月吉日小傳馬町三町目板本所　柏屋與市」とあり、柏屋は當時江戸における有數なる書肆なりしことは、菱川師宣が畫ける天和二年版の『貞德狂歌集』（本會第四期刊行、同書には堺町とあり）をも刊行せるにて明かなり。且つ本書は大田蜀山人舊藏にて『南畝文庫藏書目』卷三「祕史奇書」の部に見へ、のち霞亭文庫に入りたるものにて、これまた蜀山人藏本にて、稀覯と稱せられたる『ねこと草』と共に、期を同ふして複製するを得たるも一奇なりといふべし。

本書の梗概は、都西山のほとりに住める木阿彌といへる僧、貧家親知少なく　世にも淺間しく暮らしけるが、不圖思ひ立ちて、江戸に出でゝ按摩取りとも身をなして、大名高家に近付き、立身出世の途を計らんと、一笠一杖の身輕にて、夜にまぎれて都を出て、貧樂の海道下りもいつそ面白

く、行く先々にて狂歌を詠じ、幾日かを重ねて江戸に入り、金六町（京橋の南詰を東に下れる河岸通りにて、いま京橋區銀座一丁目となる）の知人を便り、嘘八百の大盡風を吹かし、翌日は堺町見物と出掛け、その歸るさに江戸橋の袂にて、金子五百兩を拾ひ、わが物の如くに亭主に誇示して安堵させ、その明る日吉原へ繰込まんと、さる太鼓持を東道として、三浦屋の高尾太夫に相見え、春の夜の夢心地にて、寢返りするよと思ふはづみに目覺むれば、翠帳紅閨のそれならで、身は住慣れし昔ながらの西山の庵にて、君が手なれの新枕も、拾ひし黄金の花も、お江戸下りも　みな粟粒一睡の邯鄲の夢なりしを綴れるものにて、「さてこそ世話にも傳へ聞く、もとの木阿彌とはこれよりも始まりけると、貴賤おしなべて笑わぬものこそなかりけり」といふにて終れり。

以上の如く、その骨子を謡曲の『邯鄲』に得たるものにて、今期刊行の『ねこと草』（寛文二年版）と同巧なれど、かれはその意匠を戯愛趣味におき、文脈も假名草子の墻壁を越へず。これは通俗化に一歩を進めて、その構想を現實の世界にもとめ、道行振りも『竹齋物語』の如く滑稽を交へたるは、その制作年時の距り遠からざるにも不拘、蓋し長足の進展を見たりといふべきなり。

殊にその事態を展開せしむるために、作者が行文に意を用ひたる、例へば下卷の吉原にて豪遊し、宴たけなはなる時、禿が扇おつとり「あら〳〵面白の地主の花のけしきや」と、謡曲『田村』の一節を舞ひしに對して、木阿彌も「山寺の春の夕くれ」と同『道成寺』を以て之に酬ひ、案内者の興助も興に乘じて『榮花とも榮耀ともげに此上やあるべき』と、これも謡曲の『邯鄲』を持出せ

しは、全編終局の伏線とせしにて、心憎きまでの所業なり。かくの如き作品は、繪入讀本として面白可笑く、必ずや當時の讀者に迎へられしならん。さきの『ねこと草』と同じく、西鶴以前の平民文學として、また本書の價値が見らるべきなり。

挿繪も丁數の割合に豐富にて、各冊見通しのもの六面づゝを有し、しかもその畫風より菱川師宣筆と察せられ、風俗の畫證として見るべきものまた多し。上卷第三圖の驛舍の店頭にて入浴せる狀は、『人倫訓蒙圖彙』卷三『旅籠屋』の畫面と、巢林子の『丹波與作待夜の小室節』（寶永五年作）中之卷の「詞これお泊りぢやないかえ、泊りならとまらんせ、とまらんせ〳〵、旅籠安うて泊めませう、上旅籠中旅籠、お望み次第すき次第、地椀家具も綺麗な座敷はこの夏表替へ、寢道具も好うて酒好うてお茶は上々、木賃でなりと、据風呂もしやん〳〵、かゝり湯取つて加減見て、旅の汚れのあかつきは七つ立ちか八立ちか」とあるを資け。第五、第六圖の中村座表掛り、同舞臺面。下卷の第一圖、日本橋の番所、第四、第五圖の吉原格子先等、演劇花街の參考となり。第六圖に至りては、師宣得意の構圖にて『吉原戀の道引』にも同樣のものが見らる。殊に延寶天和は同人の最盛時にて、正に師宣の繪本としても、恐らく第二位を下らざるものなるべし。

前述の如く、挿繪が風俗畫證として重んぜらるゝと共に、文中また當時の世相を察すべき所多々あり。上卷の「堺町へ同道してあやつりを見せ申さん」とあるは、『牟藝古雅志』下卷所載の「延寶九年堺町荳屋町之圖」に、堺町に淨瑠璃の土佐掾、和泉太夫、薩摩小太夫、說教節の七太夫、八

太夫等の操座ありて、何れも歌舞伎に劣らぬ繁昌をなしをれる條に照應せり。また中村座に「若女方玉川万之丞、藤田皆之丞、出來島小曙、松本小源次」を始め、「喜樂勘彌」、市村座に「万能丸五郎兵衞、松本小曙、上村掃部、松本間三郎、菊本林彌、笹井しづま、山本八十郎、今村京之助」などの名を擧げて、その容色の美しさを稱へたり。これらの人々は『古今役者物語』『古今四場居百人一首』等にも見え、何れも當代の人氣俳優なりき。

また絹屋與助といへる太鼓持を、吉原への案内に頼みたり、こは今もさる事ながら、その頃は江戸のみにあらず、京坂にても一流の妓樓は、未知の人所謂一現の客は謝絶するの例なると、廓の懸引はかゝる斡旋者なくては、登樓し得べくもあらず、されば「山谷町のその中に某を存ぜぬものも候はず」と自己推薦に安心させ、大にガイド振りを發揮せしは面白し。さて北洲に入りて、吉野、夕霧、薄雲、八橋を四天王といひしは、『諸嘲記時の太鼓』(寛文七年版)『吉原下職原』(延寶元年版)に、太夫四天王、格子四天王と撰みし如く、その全盛をたゝへて、嫖客の意を唆かせしなり。揚屋の亭主は狩野探幽の畫幅を掲けて、珍客への馳走とせり。探幽名は守信、幼名采女、右近孝信の子にて、慶長七年正月十四日京都に生れ、同十七年父に從ひて江戸に下り幕府の繪師となり、元和三年邸宅を鍛冶橋門外に賜はり、弟尚信の木挽町狩野、次弟安信の中橋狩野といへるに對して、世に鍛冶橋狩野と呼べり、寛永五年法眼に任じ、寛文二年法印に進み、延寶二年十月七日七十三歳を以て歿したり。その畫技今古に通じ諸體を兼ね、これに家法を交へて大に斯流を振作せし人なれ

ば、本書にも取入れて、その歡待を盡せるを形容せしなるべし。

殊に木阿彌が廓通ひの扮裝は「黑縮緬に絖綸子、黃無垢白無垢肌小袖、上には縮珍の黑羽織、茶丸の頭巾を引かふで、金鍔のはみ出しに、後藤が打つたる金目貫長さ一尺計りもあらんと覺しきを、放し目貫に打たせつゝ、しやむ印傳の胴亂に、石臼ほどなる珊瑚樹を二つ揃へて付にけり、鹿といふ小者には、擅木杖をもたせつゝ」とあるは、當世風の粹を盡せるものにて、その行態は師宣の繪本にも屢々見受くるものにて、是又時代風俗の參考となるなり。

用語にも、花の都に對應して「花のお江戸」といへり、この語は本書こそ、その最も古き所見なるべく、卽ち江戸禮讃の一表示と見らる。太鼓持與助が木阿彌を見て「よきなんひんと思ひ」とあるは、今も「よい鴨」といふに同じく。木阿彌の風體を「道々にての勿體は、ゑもいわれぬせのじにて」とか、揚屋の主人が關東訛りの卷舌にて小賢かしくいふ世辭を「いけぬこせきの卷舌」といへるは浮世草子の「古釋」に相當すべき歟。

按ふに、人として誰か富貴榮達を冀はざる者あらん、されどその境遇によりては、その希望を達する事難きより、或は他境に行き、遠國に走らざるを得ず。これらの人々は、その目標とする所はまづ花の都なるべし、室町期に成れる狂言に、都に奉公を稼ぐ者が惡者に欺かるゝさまを脚色せしもの多きは、這裡の消息を語るに充分なり。その成功せるものは、お伽草子の『一寸法師』『物草太郎』なるべし。殊に德川氏が覇府を樹立したる新興の江戸は、所謂土一升金一升の繁花を來

し、西鶴が　天下泰平、國土万人、江戸商を心懸げ、其道々の店出して、諸國より荷物、船路陸著の馬方、毎日數万駄の問屋つき、爰を見れば世界は金銀澤山なるものなるに、これを儲くる才覺のならぬは口惜しき事ぞかし」（『胸算用』卷六）といひし如く、身を立つるは此處なんめりと、四方より來れど、功成り名遂ぐるもの果して幾人かある。その多くは事志と反し、終に一生を棒に振るものゝ夥しきに鑑みて、作者が木阿彌を假りて、これら都會集中熱病者を警しめんとせる用意もあるやに考へられ、こゝに教訓物としての要素も多分に含まる。

なほ本書に直接暗示を得しや否やは知らねど、黑本、黃表紙等にその趣向を同うせるものに、黃表紙の祖といはるゝ『金々先生造花夢』（安永四年懸川春町作）、次て『金銀先生再寢夢』（安永八年同作）、『金々先生造花夢』（寛政六年山東京傳作）、『金々仙人通言一卷』（刊年未詳富川吟雪作）等あり。就中『金々先生榮花夢』の主人公の如きは、身貧にして浮世の樂しみを極むる能はざるより、奉公を稼がんために江戸に出てしといへり、向上發展は可なるも、その期するところ淫樂にあるは違へり。さはれ本書とその一類のものを讀過して、何を得んか、その分に安んずるの一事なり。

（原本、東京帝國大學附屬圖書館藏）

懷硯　大本　五冊

西鶴の諸作中、最も疑問の多かるべき本書の完本は、早稲田大學に一部を藏するのみにて、他に

傳存するを知らず。故山口剛氏は、右の完本の外に、僅かに二つの缺本を囑目せる由、『西鶴名作集』解說に記せり。本書がかく稀覯なると、西鶴の奇談小說の傑作なるにも拘はらず、その名が好色本に蔽はれて、同系の『西鶴諸國咄』にも增して、人口に膾炙せざりしなり。本會が多年の懸案たる西鶴代表作刊行に本書を選みしは、たゞに稀書たるを以てしたる好事にあらず、その內容形式が、後來の近路行者、三宅嘯山、上田秋成、伊丹椿園、建部綾足等の作品に、多分の示唆を與へたるものなる事を思ひ、重要なる近世文學檢討の料として、原本の姿を如實に現出し　こゝに學界に提供するに至れるなり。世間或は本會の事業に對して、好古癖に因る閑事業を以て目視し、學界に忠實なる態度に非ずと貶評する人あるやに聞けり、これ恐らくは本會複製本の利用の道を知らざる初心者の速斷なるべく、然らざれば本會の事業を妬む偏見者の流說にして、苟も本會刊行の主旨が研究の資料と鑑賞の對象を兼ぬるに在ることを知悉せらるゝ人の取らざる所なるべし。

本書の傳來に就ては、最近に臺北帝國大學助教授瀧田貞治氏が、その著『西鶴襍俎』に、「早大本「懷硯」の傳來」と題せる一文を發表せられたれば、いま同氏の許諾を得て、この解說に假用することゝせり。

本書は現在五冊を合綴して一冊となし、粗雜なる茶表紙に裝はれ、何人か「懷硯　西鶴作　全五冊」と墨書せる題簽を貼付しをり、幸に改裝に當りて、周邊を截斷せざりしを以て、當初の書形を知ることを得るなり。

開巻序文を以て始まり、こゝに大小十顆の印章を押捺しをり、次丁には「懐硯総目錄」として、巻一より巻五までの目錄を列記し、次で三丁表には内題を有せず、直ちに本文に入れり。巻末に「巻一終」等の刻記なく、順次巻五に至る。最終巻に奥附を缺き、そこには「江戸四日市古今珍書儈達磨屋五一」の方印あるのみなるが、序文に「貞享四年花見月初旬」とあるにて、その刊行年時が推定せらるゝなり。各巻柱記に「宿」の一字と、その下方に各巻の數字あり。

右序文の傍に押捺の印章中、「遼清、松忠、山兵、稻、龜」の五顆は、何れも貸本屋所用のものなるべく、次に「詞華堂」（江戸の歌人細井貞雄）、「待賈堂」（達磨屋五一）、「饗庭文庫」（饗庭篁村）の諸印と、富山房寄贈印と早大の藏書印とあるにて、傳來の徑路を想察すべく、その改裝に就ては、詞華堂印が各巻頭にあり、待賈堂印が合綴せる巻頭と、達磨屋の方印が巻尾にあるより考へて、この兩者の間にありし人が、紛失離脫を恐れて、合綴せるものにて、書儈とはいへ愛書家たりし達磨屋が、かゝる無謀を敢てする事は、萬々無かるべきなり。また饗庭文庫への藏歸は、達磨屋より直接なるや否やは知らねど、待賈堂在印本は、珍本として市場價値も高きを以て、再び貸本屋の手に渡る筈もなく、或はその間一二の蒐書家を轉々せしや、そのゝち富山房が新築記念として、早稻田大學に寄納せる經緯はこゝに言ふ迄もなかるべし。

本書の第一巻に總目錄を掲記せるが、その例は僅に『西鶴名殘の友』に見るを得るのみなり。また奥附の缺けたることは、本書研究の上に最大の故障にて、名古屋伊藤爲之助氏所藏の本書巻五の零本も改裝されて、奥附の無きは遺憾の極みなりとす。蓋し巻五の最終丁に、刊行年月出版書肆名を刻記するの餘地なきため、次丁即ち裏附け（裏表紙見返し）に刊記ありしが、原表紙剝離の際亡失せるにや、伊藤氏藏本が同じく改裝本なるに徵して、これまた考慮すべき一事なりとす。

以上は瀧田氏叙述の要旨を取れるものなるが、元來本書には西鶴の署名も印章も無く、果して西鶴の作品なりや否やに就て、區々の論考もありしが、總目錄及び最終章の祝言めける體樣、文脈等を綜合研究して正に西鶴の作なりと諸家の意見一致するに至れり。

書名の「懐硯」に就ては、本書巻一の第一章「二王門の綱」の冒頭に「朝顏の畫におどろき我八つにさかりぬ、日暮て道をいそぎ何國を宿とさだめがたきは身の果墓なやとおもひ籠しより修行に出給ひ、世の人こゝろ銘々に木々の花の都にさへ人同じからず、まして遠國にはかわれる事ともありのまゝに、物がたりの種にもやと旅硯の海ひろく言葉の山たかく」とあり。懐硯即ち旅行用懐中硯のことにて、その用語例は『男色大鑑』巻四の第二章「身替りに立名も丸袖」の條に「出家の身にも荒る鼠はうるさく、國に盜人とはいへど、錠もおろさぬ入口、いづれ治まる時津風消かゝる灯挑のしんとらせて懐硯に雫をそゝぎ、軒ちかき芭蕉のひろ葉に書殘せし」とみえたるを以て、本書の内容が諸國にて見聞せる奇異雜談を懐硯にて書記せるものなるの意を、書名に含ませたるが知られ。これに本書序文の文意を合考して、その題意と成立への過程も分明せり。

本書の柱記に「宿」の一字あるは、本書別名の一字なるか、或ははじめ「宿」の字ある書名を附

せしが、刊行に際して急に書名を改めしかとの說もあり。瀧田氏は『廻國一夜宿』といひしにあらざるやといふ人もあれど、そはかゝる書名を附せるもの出でさる以上遽に信ずべきに非ずといはれたり。更に以上の諸說に蛇足を添へなば、本書に改題本『匹身物語』ありて、卷三の零本は頴原退藏氏によりて『上方』誌上に紹介せられ、卷四は瀧田氏の藏本にあり、共に『懷硯』の板木を襲用し、僅に標題柱記を改めたるものなる由なり。また本書を剽竊したるものに、寶永二年版の『筆の初そめ』五冊あること、山口氏の『西鶴名作集』にも見へたるより考へて、本書刊行當初は「宿」に緣ある書名を附し、次に序文年月の下にある署名印章（もし有りとすれば）を削り、これに書名を替へたる總目錄を添へ『懷硯』と改題して再摺したるにあらざるやの疑ひも生せざるを得ず。尤も外題內題と柱記の異なる例は間々あり、例へば『女用訓蒙圖彙』は內題に『當流女用鑑』とあり、『都風俗鑑』は、柱記に『笑大全』とあるなど、本會最近の刊行本にも見らる、これらの考究は何れも博雅の發明に俟つもの多し。

本書原本は竪八寸五厘、横五寸七分、全五卷にて、卷一は二十三丁（內、序目錄三丁）、卷二は二十丁、卷三は二十一丁、卷四は二十丁、卷五は十九丁。原本各卷三丁目の丁附は「三ノ四」とありて、最終丁の丁附と、實際の丁數とは一丁づゝのひらきあり。挿繪は各卷とも見通しのもの三面と半丁のもの二面ありて、交互に排列せられ、一章一面の割合となりをり、畫風は吉田半兵衞の筆致ありて、畫く所の風俗器財何れも畫證として貴ぶべきもの多し。

本書は、京都北山等持院の邊に住める伴山といへる半僧半俗の閑人が、諸國を經廻りて見聞せる奇異雜談を輯錄せる形式を取り、江戸の二話、京の一話の外に、山城、大和、攝津、河內、伊勢、紀伊、近江、駿河、相摸、下總、飛驒、越中、越後、出雲、筑前、筑後、日向、大隅の各一話と讃岐の二話を每卷に五話づゝ收め、全部二十五話を以て結びたり。京に始りて江戸に終れど、必ずしも地理的に聯絡あるにはあらず。その內容は、淺井了意の『伽婢子』系統の怪奇小說に屬し、さきに西鶴が著せる『西鶴諸國咄』と類を同うするが如くに見ゆれど決して然らず。『諸國咄』は假名草子本來の姿をうけて、しかも現實味あるものを述作したれど、本書に至りては、既に『好色一代男』、同二代男、同五人女、同一代女、近代艶隱者、男色大鑑』等の傑作を發表し、所謂浮世草子作家としての薀蓄を、奇談小說に假りて作出せるものにて、そこに『諸國咄』と內容系統は同じきも、浮世草子化乃至俳諧化せる本書との間に、自らなる相異が見らるゝにて、その最も著るしきは「二王門の綱、鞍の色にまよふ人、枕は殘るあけぼのゝ緣」などを例とすべし。

また後來の讀本に與へたる本書の影響も看過すべきにあらず、その一は「二王門の綱」は、建部綾足の『折々草』秋の部上の「武藏上毛の二國に水溢れしをいふ條」に、その二は「案內しつてむかしの痕所」は、上田秋成の『世間妾形氣』卷一の「やあらめでたや元日の拾子が福力」の條などにその顯著なる痕跡あり。

更に各章に現れたる事例を見るに、卷一の第三章に江戸築地の賣女のことを記せるは『好色一代

男』の記事を責け。卷二の第一章に不淨の場所には脇指の柄に白紙を卷く事は、今も操人形の『假名手本忠臣藏』の判官切腹の段に出る檢使の扮裝に殘れり。卷三の第一章に水浴せの行はれしことが特に風俗研究の參考となるなり。その他はその時々に從つて必ずや有要なるべきを信じて疑はず。

附記　本書卷一の二丁ウ三丁オに亙る挿繪にある詞書「うしがあしひく、ぬきではこうさ、ぬきではおよげぬ〳〵」の文字は、後人の惡戯による書入れなることを、瀧田貞治氏より注意せられたるを以て、これは當然畫面より削除すべきものと御承知を乞ふ、校正者不行屆の罪を深くお詫びすると共に、同氏の御敎示を感謝する次第なり。またその後同氏より『廻國一夜宿』と稱するものを入手せしが、それは本書と全く別種のものであることを知れる旨示敎せらる。玆に再びその厚意を謝す。

（原本、東京、早稲田大學附屬圖書館藏）

風流連理樅（ふうりうれんりのたまつばき）

横本　三冊

西鶴が『好色一代男』を著して、所謂浮世草子の一部門を開きしより、北條團水、西澤與志、江戸にては磯貝捨若、桃林堂蝶齋等の諸作行はれ、元祿末年八文字屋自笑によつて『傾城色三味線』、寶永に入りて『傾城卵子酒、風流曲三味線、寛淵平家物語』など版行せられ、こゝに「八文字屋本」と稱せらるゝに至れり。次で正德元年『傾城禁短氣』の傑作出で、當時の讀物中隨一といはれしが、それらの諸作は、昔の出來事や、今の世にも有勝ちの事を、たゞ一篇の小說として、構想の奇と叙述の妙を競ふに止まりしが、享保に入りては、操劇に歌舞伎劇に、當時の心中事、その他の事實を脚色せるもの出づるに及び、浮世草子もまたこれに追隨せり。本書は卽ちこの時期に生れたる事實小說の一なり。

事實小說は、その端を平安朝に發したれど、版本としては、寛永の『大坂物語、太閤記、聚樂物語、吉利支丹物語、福齋物語』等ありて、その權輿をなせど、軍記體或は假名草子に屬するものにて、僅に時代を反映せるに過ぎざりき。寛文延寶以後は、人心漸く惰弱に流れ、色道の取沙汰絕えず、元祿に『心中大鑑、心中戀の塊り』等、情事に關するもの二三出版せられたれど、是亦その記述單純にして、未だ小說的詩化をなすに至らざりしが、下りて寶永正德の『京縫鎖帷子』『女敵高麗茶碗』の如き、作家の直接見聞にかゝりしものは、その關係人物に變名を用ひ、その結構にも多少の作意ありと雖も、當時の氣分全紙に溢れたり。殊に本書に至りては、流行の歌謠に取入られ、世間に喧傳されたる事實を取材せるにて、近世文學研究の好資料といふべきなり。

本書は、名古屋飴屋町花村屋平右衞門の抱遊女小さんと、疊屋喜八が、同地閻の森にて心中せることを骨子とせるものにて、その實說は『歌舞伎研究』第十八輯に、松村靜雄氏が「宮古路豐後掾と名古屋心中」と題して發表せる中に、引用せる『風流夢の跡』に詳かなり、その書に、

飴屋町筋を下へ少行東へ行道富士見原の道也

まとはるる甘みやふぢの飴屋町　讀人不知

飴屋町少し上へあがり狂言芝居有、暫くの内致し仕廻けり、東へ行小路有、兩側十軒計りも地女の夜店有、夫より下へ行筋飴屋町裏門なり、うつの山とも言べきほのくらき道をたどる小家がち成中に、少し出はなれたる花村屋が竹格子いと哀れなり、五條あたりの軒の妻ならば、たそがれ時の花村屋と、式部が筆にかゝりなんものを、おしや抱子の三四人有其中に、小さんは日おき町へんたゝみや喜八と、くらがりの森にて、享保十八丑の霜月下旬心中を催しけるは、親達の前への方便にて、内に入る謀計にや、二人ながら剃刀にて、少しづゝかすり疵にて、養生に及びて全快を得、兩人共牢舍致し罷在候、寅の二月末つかた、牢屋敷前に罪人の如く三日の内、右二人西向に晒されしは四方の罪とは事替り、いとめつら敷、喜八は薄花色袖四ッ目結紋所、下着も花色着なれさるを着し、帶は黑とび紗綾、雪駄は大坂切廻し、小さんは黑の絹裾模様光琳つたかづらの白あけ、うら紅紋絹のとくさ色帶、雪駄せきれい、二人ながら前に竝べて有り、兩人いましめへり取り上に座らせ、初日は朝五ッ時より晝少し前迄差置れ、二日めは一時計、三日目は少々の内、其日御免にて、夫婦はたこや町親元へかへりしとかや、其後玉の男子を出生いたし、今も替らず居にける、其比袋町黃金藥師に、此心中を連理の玉椿といふ淨るり宮古路豐後出語り、中村条太郎染五郎等子ども芝居眞最中の時なれば、見物たけなは老若男女彌上へ重り、名さへ廣小路もせま小路に成りて、東西の往來群集にて有ける、八文字屋行笑作五冊本何國までもひろまりし

は、浮名の恥と聞へけり、扨南へ暫行當れば、富士見へ行筋云々

とあり。松村氏は、右の記事と他の資料に考據して、從來豐後掾の『名古屋心中』上演を、享保十六年とせるを覆して、同十九年正月と認定せり。また前出の文中にある「八文字屋行笑作五冊本」とあるは、當然本書なるべきこと、「此風流玉椿の三卷は、流女の習ひとて、明日は見ぬ顏せふと、今日幅をやる大臣には、まづ氣をとる爲に、心にもない事をいふが商賣と、一節語る晉曲に尾鰭を付て、嘘の上塗を慰みの種に述る事左の如し」と、本書の序文にあるにて明かなり。蓋し五冊本といへるは誤りにて、『日本小說年表』にもしか記せど、こは三冊と訂正せらるべきなり。本書に花村屋を金村屋、喜八を伊八とせるは、豐後節より取りたるなれど、その筋立は心中の件を省き、遊蕩の費用に養父が預りをりし吉光の刀を持出し、芝居見物中に何者にか盜まれしを、預け主より取戻しの嚴談をうけ、その言譯なさにおさんと共に名古屋を逃れ、伊八は京島原にて下男となり、玉椿の名香を所持せるが緣となり、さる客人より路銀をうけ、江戸吉原にて金山と名乘りをるおさんを尋ねたり。こゝに熱田の八劍甚平といふが、知人と共に吉原に遊び、計らずも金山のおさんに出會ひ、また玉椿の名香のことより、甚平は伊八の實父京の椿屋伊左衞門の恩顧を蒙むりしものなることゝ、伊八が盜まれし吉光の刀が大坂にありと聞き、二人相與に上坂して、おさんは新町の遊女となり、名も金村と改めて勤めゐたりしが、たま〳〵京より春木大盡といへるが來り、おさんの身の上を訊し、さてわれは伊八の實兄にて椿屋伊助なるが、先年島原にて伊八に路用を與へ、江戸へ

遣りしも、刀の詮議とおさんに逢はせんとの心盡しなる事を語りぬ。伊八は吉光の刀が賣物に出たるが、金の工面に來りしに出會ひ、トヾそれを買戻し、伊助の口添にて、名古屋の養家疊屋德右衞門方に復歸せしめたり。かゝる所にさきの預け主の使來りしが、此奴は五郎作といへる惡者にて、預主由良山金五右衞門が病死せるを幸に、一ト狂言を書きしが露見し、こゝに萬事丸く治まれりといへるにて、淨瑠璃の如く悲戀の情に乏しきは、その材を他より取り、しかも趣向を變へしためなるべく、殊にこの頃浮世草子が歌舞伎狂言を取入るゝ傾向の、一つの現れともいふべし。また卷一の首章は、役者評判記の開口に當り、名古屋遊廓の繁昌振を叙して、本章への聯絡とせり。

作者其磧は、江島屋市郎右衞門と稱す、元祿十二年『役者口三味線』を作りて、これを八文字屋より出版せるより好評を得遂に浮世草子にも着手して、こゝに「八文字屋本」の稱を得るに至りしは、一に其磧の功なり。其磧と名を列せる自笑は、八文字屋八左衞門といひ、京都における淨瑠璃本、狂言本の版元として知られしが、某磧と相結ぶに至りて、盛んに好色本を出版し、また一方年年役者評判記を版行せしが、正德四年作者名のことについて、二人の間に確執を生じ、一時睨合の形なりしを、享保の初め再び和解して、作品には兩者の名を現はすに至りしも、實は其磧一人の筆なり、本書またその例に洩れず。こゝに特記すべきは、本書序文の其磧の印章に「茂知」の二字あることにてこは其磧の名なるべし。この印章は評判記その他に屢見する所なるにも係はらず、從來の其磧傳にはその事を言へるものを見ず。

本書刊行年時は、序文に「享保二十年卯三月吉日」。卷末に「享保二十年卯ノ三月吉日、八文字屋八左衞門板」とあり、これ卽ち宮古路豐後掾が名古屋にて『睦月連理櫛』（一名、名古屋心中）を上演し、その秋江戸に下れる翌年の版行なり。この出版と同時に三月十五日より、大坂角の芝居にて、民谷四郎五郎、雲浪瀧江、中山新九郎等によりて、『小さん伊八睦月連理椿』が興行され、江戸にても同年三月中村座にて『睦月連理玉椿』を上演せり。『江戸芝居年代記』に「かな村やおさん　姉川千代三、疊や伊八　中村新五郎、おさん母　澤村宗十郎、しうたん大當り、豐後ふし上るり珍敷大入大當也」とあるが、享保二十一年版『役者福若志』澤村宗十郎の條の「去年の盆、金村屋のおさんが親になり國太夫節の上るりの文句入れての大當り、今に思ひ出します」。同書嵐喜三郎の條の「喜三郎殿は去年金村屋のおさんよりめき〳〵當りました」（江戸芝居年代記に姉川千代三とあるは誤カ）に照應せり。かく三都にて持囃せるは、必竟豐後節の流行と、その事實の名古屋にありしが呼物となりしならん。

本書原本は竪五寸二分、横七寸二分、全三卷、上卷十七丁（內、序文目錄二丁）、中下卷とも十六丁、（兩卷とも內、目錄一丁づゝあり）にて、その書形の横さまなるより「横本」といひ、その形の木枕の大きさに似たるより「枕本」ともいへり。こは元祿十四年の『傾城色三味線』が、役者評判記の半紙二ッ切本なるに倣ひし以來のことにて、八文字屋本とし言へば、直に横本乃至枕本を聯想するに至れるなり。

挿繪は毎冊見通しのもの二面づゝを有し、一畫面を二つに仕切り、畫中の人物に詞書を添へたるは、淨瑠璃本、狂言本に胚胎せるなり。その一々は風俗の畫證となることは、斯種好色本の特長なりとす。從つて行文も會話を織交ぜしため、時代語を知るの便あり。その一二を例擧せば、前者にをいて上卷の第二圖の、雨の日に太夫を揚屋に負行くさまは、『骨董集』に『私可多咄』（萬治二年版）、『好色二代男』（貞享元年版）と『異本洞房語圖』（享保五年記）の記事を載せて考證し、且つ『私可多咄』の挿繪を出せるが、本書のそれと共通せり。中卷第一圖の品川宿に「しな川色茶屋町と註し、旅客を引留むるさま。下卷第一圖の新町の入口に紙見世を描出せるなど、とり〳〵に面白し。また言語にありては、「幅をやる、義派なる武士、古釋、骨切の大臣、はがねを鳴らした大臣、與七奉公、めて成姫、黄なる物」等、次に諺語の「索麵と女の腰は細きがよし、閏年には干鮭も杓子も孕む」、「寢耳へ小判」、「川中へたてど人中には立れぬ」、「鴈は八百」と、茶屋の亭主が祝儀をはづまれて「是は旦那のなされ方、きついのぜうめう一來法師」と洒落れる所、浮世草子ならでは味ひ難き所あり。なほ大坂の風色を稱するに、「畫過川口へ漕出す御座舟、畫網の雜喉は、話ながらあたま押へて沖繪、酒くみかはすおりはへて、月東山に指出たる景色、金波千里の海づら、入日のほとをりいまた西嶂に殘れば、帆かけ舟かすかにみゆるなど、何と都の珍客かふした圖は、いかな京都にもあらふまいが」といふは、西鶴の『好色一代男』卷五「今爰へ尻が出物」の條の「天下の町人の思ひ出に御座舟のうちには（中略）笹葺の假湯殿、鯛鱸の生舟、畫はらく書して、ゆく

水に扇流し、夜は花火のうつり、おのづと天も醉り、いやまた此舟遊び京の山にはまさりしを、內裏樣にも見せたし」といへるに照應して、いかにも豪華なりし町人生活の半面が窺はる。

風俗資料としては「名古屋帶胸高に前むすび　遣女にあらぬ下する女の赤前垂、小袖羽織を損料出して借り調へ、あたまつき跡さがり髮はのんこ紙子羽をりに黑じゆすのゑり」などが目立つたり。殊に豐後節を取材せるを示したために「御當地（名古屋）にて、宮古路といふはやり太夫が上るりに、嘘を賣のが商賣と語出して、今もつはら諸國浦々迄口ずさみもて興ずる」、「うそを賣のが商賣と、今國々でいひはやらかす、根本の正體はあの女が事、扨も〳〵顏のうつくしいには似合ぬ肝のふとい女じやな」など〻言囃して、讀者の心をそゝれり。それにも增して味ふべきは、中卷末章の「眞の粹は十露盤枕に內にねて花をやる」の條の、二木の言の「わき心なく間夫せぬ女が好ならば、內の女房で濟事、傾城の眞を立て人每に實を立ふなら、遊女の身はたまるまじ、金つかふ客を袖にして、錢のない間夫に心を運ぶは、傾城のきつすい戀知の根本」とあるに次て「世に間夫ぐるひする男の盗あひの女郎ほど、面白き物は又外にないといへど、同じくは本大臣に成て、女郎を人に盗まれて遊ぶ身に成たが、とりかたにはいかい樂あり、たとへば銀かりて濟さぬ心と、借損してもいたまぬ程の違あり、中戸風呂屋の影、柴部屋の炭俵の間にて苦しみてあふ方より、虛氣に成て床とらして、燈で顏見て、咽がかはけば寢てゐて禿に運ばせて、茶をのむ自由こそ本樂なれ」とあるこそ、其磧の最も高唱せんとせる所なるべく、蓋し浮世草子の眞の骨頂もこゝにあるなり。

因に豐後掾が江戸葺屋町河岸播磨芝居にて演ぜる『名古屋心中』の正本表紙繪は『牟婁古雅志』巻下にあり。その詞章は『宮古路紫竹調、同桃盃、同花筏、同新玉椿、同月下の梅、同月の窓』等に出てたり。また寶暦十二年三月、江戸中村座『曾我最負二本櫻』二番目に「嵐三勝下り金村屋のおさん、疊屋伊八に武十郎、大磯屋若者本名庄司行平傳九郎、下り三勝と拍子舞あり　何れも大でき」と『歌舞妓年代記』に見へたるもありて、後々までこの狂言の相當に行はれしが知らる。

追記　この解説に就て名古屋の尾崎久彌氏より左の懇示ありたり。『風流夢の跡』の文中、「五條當り」は「五條あたり（邊）」、「日だこ町」は「日おき町」、「とりや」は「たゝみや」の誤りにて、必竟原本より傳寫の際誤りしものなるべし。更に「有けるは」は「有ける」にて切れ、「は」は「八」の誤りにて、即ち「八文字屋」となるべきなり。尙ほ小さん喜八晒しの事は、尾藩士近松氏の『南海私記』巻廿八に「享保十九寅年などや廣小路にて二月廿八日より晦日迄三日さらし、非人の手下に下さる（中略）喜八非人の手下に、金子出しのがれて隱れ住、夫婦となり居し」とあることをも敎へらる。且つ尾崎氏は松村氏より半年も前に「豐後掾東下り年代考」を、雜誌『江戸時代文化』に發表されたる由なれば　こゝに併記してその粗忽を陳謝す。

（原本、東京、安田文庫藏）

古今狂歌仙

大本　一冊

狂歌の沿革に就ては、本會第四期刊行の『狂歌浪花丸』、同第五期刊行の『狂歌旅枕』の項にをいて說ける所の如く、その淵源遠く俳諧歌までに溯るべく、もと〳〵貴族の餘技的藝術たりしが、年所を經るに從ひ、漸く卑俗となり、德川初期にありては、殆んど俳諧者流の手に委ねられ、その歌集も荒木田守武の『世の中百首』、松永貞德の『貞德狂歌集』、石田未得の『吾吟我集』、池田正式の『狂歌歌合』等の外に、專門的狂歌たる雄長老の家集などが數へらる。殊に松江重頼の門より出たる生白堂行風が、專ら力をこの方面に致せるより、いよ〳〵隆盛を來し、寛文五年に『古今夷曲集』、同十二年に『後選夷曲集』を刊行して、斯界のために氣を吐き、當時の俳人を網羅したり。また繪入狂歌本には、寛文九年の『狂遊集』、『犬百人一首』あり、これ明暦四年版の『いなご』、萬治三年版の『百人一句』などの俳書に倣ひたるものなるべく、その畫風も古淨瑠璃本挿繪の簡素なるに反して、構想落筆頗る精緻を極め、轉た肉筆風俗畫を想はしむるものあり。本書またそれに次で出でたるものにて、愛香軒眼鼻子の撰に係り、雄長老以下三十六人の狂歌を記し、その左頁に歌意を畫き、上下二冊に分てり。

本書原本寸法は竪九寸、横六寸、上巻二十一丁（内序文二丁）下巻十九丁、下巻々末に「延寶七己未歳夏至吉辰日　川勝又兵衞嘉珍開板」の刊記を有せり。なほ原本は何れの時にか改裝合冊せられ、原題簽の書名下に右とあるが貼附しおれり、こは下巻を意味するものとして、元祿九年版の『俳諧まくら屏風』に倣ひ、複製本の上巻には「左」と記入して、原形に復したり。もと弘前醫官澁江抽齋

の藏書にて、後に達磨屋五一の有となり、轉々して北田文庫に入りしが、また出てゝ現藏者架中のものとなりしなり。

本書の狂歌作者に　蓮生法師、蓮如上人、一休禪師等、年代の隔りあるものをも載するは、序文に謂ゆる「和歌は勿論連俳さかんにして京よ田舍よとひしめけとも此され歌のみ時を得す梓に鏤めしはわつか二三部に過すそのうち事の聞へやすきを書拔きてんやと唆かされ」て、此書を成せりと言へる如く、故人今人ともに、收載作歌の多くは『雄長老狂歌集』『貞德狂歌百首』『古今夷曲集』『後選夷曲集』『卜養狂歌集』等に出てたる、卽ち「事の聞へやすきを書拔き」たる爲めなり。なほ右の作者中、その略傳すら知らるゝ人尠からず、いまその二三に就て得たる所を記す。

小濱民部少輔嘉隆　『古今夷曲集』作者目錄「地下小濱氏民部少輔嘉隆十二首」とあり、幕府旗下の士にして、大坂御船手番頭を勤め、寛文四年三月廿三日六十五歳を以て歿したり。

蜷河智薀妻　『後撰夷曲集』作者之目錄　女房蜷川氏智薀妻」とあり、其夫のことは『犬筑波集』にも見へ、また『古今夷曲集』に「僧官　智薀法師一首」とあり。

栗田玄康　『誹家大系圖』貞德門流に「栗田氏、名字詳カナラズ、城南伏見ノ人、荻野安靜ト友トシ善シ、連俳ニ達シ、都下ニ鳴ル」（俳書大系本に據る）と見ゆれど、本書には正しく栗田氏とあり。

春丸　『誹家大系圖』に「田井氏、通稱七郎兵衞、京都祇園ノ社人、歿年詳ナラズ、百人一句ノ

一人」と見ゆ。

淡路守宗增　『古今夷曲集』に「地下　淡路守宗增三十五首」とあり。

入安　『古今夷曲集』に「住所不知　入安三十二首」とあり、その吟咏の殆んど全部の前書が「百首歌の中」とあれば、これもその一なるべし。

嶋久清　同書に「攝州大坂井所々嶋久清四十一首」。

嶋田之時　『後撰夷曲集』に「大坂井所々　島田氏之時六」。

齋藤滿永　『古今夷曲集』に「攝州齋藤氏滿永廿首」。『後撰夷曲集』には「春歌」と「戀歌」の狂文あり。

この外「後松軒仲安、稱念寺江流、藤原宗益、隱者宗吾」の事は明かならず。また津田休甫は、『古今夷曲集』に「攝州戸齋休甫」とあり、『誹家大系圖』には「津田氏（本姓字喜田氏）江齋ト號ス、大坂生玉ニ住ス」とありて、本書の「谷之坊」の稱は全く初見なり。

その他、假名草子の作者たる淺井了意の狂歌は『東海道名所記』、江戸名所記』等にあるにて知られ。また西鶴と親交ありし中堀幾晉が名を列しをるを珍なりとす。更に珍菓亭言因、後の由緣齋貞柳が、その父藤原貞因と、叔父花實庵貞富と共に出詠せるに考へて、撰者愛香軒が「聞へ安きを書拔き」たりとは言へど、歌仙に擬して限りある人數に、この類觸れを見るは、いかにその師豐藏坊信海の聲望と鶴屋一門の勢力が、本書刊行の上に加はりしかゞ察せらる。

語句に就ては、序文の初句に「是のみは他の國より傳はるちんぷんかん」は、意味不通の場合に今もいふ所にて、『嬉遊笑覽』に『洛陽集』の「蝶阿蘭陀やきたつて蝶まふちんぷんたる聲」を擧げをれり、同書は延寶八年にて、本書刊行の翌年に當る。法橋由巳の歌の下句にある「樂阿彌」は、能狂言にある尺八を吹き死せる樂阿彌を取りしにて、それが浮藏主とやゝ同意の氣樂坊に轉化し、萬治版の『東海道名所記』の主人公にまで擬せられしなり。諺語をそのまゝ繪畫化せるものに、北村季吟書入の卷子を寓目せしことありしが、こゝには「提燈に釣鐘」を現はせり、當時かゝる戲畫の行はれしより取入れしなるべし。之時の歌の「弄齋」と「瘍瘵」をかけたる、幾晉の歌中の「鍋錢」等、その頃の草子類と合考すべき所頗る多し。また畫面も當時風俗の畫證とすべきものゝみなり、就中飼鳥屋の店頭、河床にて尺八の速吹、節分の夜の商家、筑摩祭の鳥居前など、とり〳〵に面白し。殊に卷尾の右近源左衞門の舞姿は、版本における最初のものと考へらる、同優は明暦寛文を盛時とせる女方にて、本會今期刊行の『都風俗鑑』卷三にも「むかしえびすや吉郎兵衞右近源左が女形とてはやらせしをりには、手拭にひとしき絹ぎれをかぶりて、女がたとこそいひしに」とある扮裝が如實に見らる。

前出の如く、本書の作者は俳人なりと雖も、その大部分は貞門の出にて、他派に籍を置けるは岡西惟中、中堀幾晉等に過ぎず、更に延寶の末に至りて生白堂行風歿せしより、こゝに俳諧と狂歌は全く阻隔するに至れり。前者は西山宗因、井原西鶴によつて談林の大を成し、後者は豐藏坊より由

緣齋貞柳に傳りて、長く柳門の名を殘せるなるが、本書はかゝる過渡期の撰集として、上方狂歌師の推移を語り、また繪入本なるにをいて、同時に行れし俳書との交渉、その畫風と筆致が當期假名草子より發生せる浮世草子挿繪との關聯等、その一々は大方博雅の尋究によつて、更に得る所あるべきを思ふ。

附記　會員尾崎久彌氏より本書に關して左の示教ありたるを謝す。

稀書複製の第一期よりの增補材料として三、四申上る事有之候へども八月中にまとめて申上る事として今はとりあへず『古今狂歌仙』について申上候即ち家藏の後摺との比較に有之候

家藏本（享保十年の後摺）　上下合本

元表紙――淡き紺色の分厚な表紙、四方折込表紙にて横六寸二分、竪八寸七分

題簽　不明

柱　上卷は上部に「上」下部に丁數の文字

下卷は上部に「下」下部に丁數の文字

猶丁數は（上）十ノ廿、（下）十ノ廿、と互にありて各々十丁づゝゴマカシて飛べり。よりて（上）は卅一終（裏は矢張り白）

（下）卅一終（一表は矢張り白）

〔上卷〕本文狂歌及び繪、全く同一版木の後摺と覺しく序文より一切合切同じなり。但し一ヶ所

だけ異同あり。藤原宗益の歌の左の繪、元摺（複製本）の内の算盤だけを削りてなし

〔下卷〕本文の狂歌及び繪、全く同じ（些の異同なし）

〔下卷〕最後の裏半丁分は左の七行を以て埋む

いにしへを今に引みる狂歌仙
吟ずるにおかしくはらすじの
よれるをもときかねそのまゝ題して
書つゞくるもいとさはがしや

享保十巳正月吉日

家藏本は元霞亭文庫藏、序文の「奥村氏のなにかしは」とある奥村氏の三字右に朱圈點あり、渡邊氏ならん、恐らく之によりて政信畫編と思ひしならん、小生も今度の延寶本の出現までは之にゴマカサレたり。

美夜古物語

半紙本（原本は中本）　一冊

作者　京ノ鶯
江戸日本橋升屋五郎左衛門板

（原本、東京、三村清三郎氏藏）

本書の内容概觀は　明暦二年四月の末に、近江の國人が都見物に來り、名所舊跡を巡覽して、やがて歸國せんといふに、宿の主これを引留め、嶋原に案内を慫慂せしに、不粋の田舍漢なるを以て、これを辭せしを、「今の世は人の心賢しくやなりけん、愚にやなりけん、斯樣の事まで、教への文世にひろまり、難波物語、嶋原集、寢物語とて、樣々の事書ける物有り」とてこれを示し、さらに大坂に『まさり草』の版行ある旨を告げ、その内容を指摘して、「教へのために書かば、座敷の體、張合の意氣込、口說の品、挨拶の言葉なと書きてこそ、教へにもならめ」と、その不備を譏り。而して主客對問の形式を採りて、遊樂の眞諦は「慰みとはかり行かば、せくとも憎むこともあらじ」と說き、「多く行く者は、德の内に損あり、多く行かざる者は、損の内に德あり」と道破せるを前段とす。遂に主客相携へて、出口の茶屋に腰掛けながら、連れ立ち歸る嫖客が、遊里の諸分を語るを聞き。やがて春宵一刻の樂を盡さんと、某樓に上りて酒宴に移り、青簾掛渡せる中より眺めて、客が「せめて其名ばかりなりとも書留めて、國にての物語にもと、記しける物ならし」と叙し。次に太夫十五人、天神四十人、鹿戀六十六人と、遊女屋十五軒、揚屋二十六軒の名を記して終局とせり。しかも一語の、遊女の一々を品評せざるは、「傾城の善惡、定紋などを知りたるとて、粋ともいはれじ」、また「多き女の事をのみ、一人して其味知らるゝ物にあらず、多くは推量、又は人に尋ねてぞ書かんずらめ（中略）人頼めに書くは、眞事なる事少かるべし」との立前なる故にて、寧ろ本書は著者一流の遊里論と見るべきものなり。

その論旨は、『嶋原集』の禮讃書、『難波物語』の敎訓書、『寢物語』の案内書めきたるを難じて、

「此物語を手本ばかりにして、粹立ての心して行かば、却りて嘲りを受くべし、又誡めの爲ぞならば、これも又不可也、此の道に落入るもの、親の意見にも從はず、友の諫めも聞入れず、勘當をも苦にせずして行くもの、いかで此物語に合點して、行くことを止めん」といひ。就中『難波物語』の變のたとへ、『寢物語』の「戀の別れ」の條の如きは、この道に迷ふの基なりと排斥するなど、前出の四書を向ふに廻して、一喝痛棒を加へたるの觀あり。

本書原本は竪六寸四分、横四寸六分、全卷二十四丁を有せり。其書名は早く『色道大鏡』の「凡例」に「一、此書より以前、世間に落ちる當道の書目」の内に見へたるのみにて、しかく世に存するを知らざりしに、原藏者の宏量により、今期複製する事を得、既刊の『難波物語』(本會第七期)、『寢物がたり』(本會第五期)に次ぐ近世風俗書の資料として提供せられたるを深謝す。其刊行年時は、序文の「明暦ふたとせ初卯月の末つかた」とあると、引書の『嶋原集』『難波物語』は明暦元年、『寢物語』『まさり草』はともに同二年の版行なるに徴して、これを距る遠からざる頃に上梓されたるや明らけし。況んや所載の遊女數の前記諸書と大差なきにをいて、なほ然るを覺ゆ。

挿繪は半葉のもの五面あり。その畫風は淨瑠璃本の『日蓮記』(承應三年鶴屋版)及び『寢物語』と同じく、大和繪の筆致が見られ、『古版小說挿繪史』の所謂『他我身之上』の系統に屬するものなり。殊に各畫面は當時の風俗畫證として見るべきもの多く、第一圖の座敷に立廻せる屏風の漢畫風なるは、其頃雲谷、狩野派等の破墨山水の重んぜられしを知り。主人の衣服紋章が撫子花なるは、かの『一代男』の世之助のそれと同一にて、かゝる優しき紋所は、當時遊冶郎の好みし所なるべく、西鶴がこれを自著に採用せる、その心利きたる狀も考へらる。第二圖の神前に扇を開いて額づけるは、いまも能狂言にその形を遺す所。第三圖の手拭かけが掛樋を兼ね、その下に澤瀉を植へたる狀、造庭の意匠また見るべく。第四圖に遊客の一人の紋樣に、丸の内に「ものよ」「とさんす」とあるは、當時流行の歌謠の末節を現はせしものなるべし。最終の太夫道中に、三味線の棹の長きことの、今と異なるが知られ。一服一錢の茶店が、定住の營業となり、遂に料理茶屋の發達となりし過程を物語るものとして、畫意以外の考據となるもの頗る多し。

卷中また時樣の參考となるもの尠からず、その二三を擧げんに、「鄙躅花」の流行なり、古くは『沙石集』にも八重つゝじの珍重せられたるを載せたれば、この頃はその種類の多きと、雅名を附せることが知られ。次に「柴垣節」の持囃されしこと、これまた柳亭種彦の『還魂紙料』に考證せる所のもの、都會にての盛行は明暦寛文にて、天和には全く衰へたるものゝ如し。黒谷あたりに「お山人形」を幔幕打廻せる中に見、更に四條河原にて「左内(山城)が松風、虎屋が(喜太夫)お山、宮内(伊勢嶋)が佐々木、吉郎兵衛(夷屋)が女形、連飛蜘舞などゝ聞分くべくもあらずぞ」と、操人形、歌舞伎、輕業と、所狹きまで建並びし光景を描き。滑水寺に土佐光信畫の緣起を展べて、所謂緣起讀みをせるなど、現に京洛の神社佛閣にて案内者が、節面白く言立つるも思はる。また嶋原にて「門より入て見れば、あたま剃下げたる年よれる男の、何事にやあらん、呼ふあり、如何

なる事にやと問へば、門さすと云ふ事を、歸れる客に知らすなり」とあり、此の頃は夜見世といふもの無かりしより、一定の時刻に門番與右衞門が、大門口を鎖すを例とせり。これ朝込、夜込の語ある所以なれど、その閉鎖することを告知せるさまは、全く他の書に見る所なし。

その他、語法に「とのじ、せく、かれたる男、横を切る、ぬらし、せの字、しや」など、何れも廓言葉にて、從來刊行の類書にも散見せり。遊客の一人が京大坂江戸長崎の妓品を比較せるは、從來の「京の女郎に江戸の張りをもたせ、長崎の衣裳を着せて大坂で遊びたい」といひし諺語の起因とも思はるゝに微笑を禁じ得ず。

按ふに、明暦の初年『嶋原集』版行ありて、遊女月旦の書始めて現れ、相次で『難波物語』『まさり草』等出で、諸分物として『寢物語』などの著あれど、その叙するところ、本書の所謂、難嶋原集、難寢物語とこそいはね、その多くは前書の非を擧げて、自著の正しきを誇り、徒らに當道に遊ぶものをして、混迷に陷らしむるのみなりき、本書がこの缺點を補ふべきものを望みしも、亦宜なりといふべし。果せる哉、呑舟軒箕山に『色道大鏡』の著ありて、「寛文格・寛文式」の目を設け、京都をその範として、諸國遊里の作業を一定せんとせり。蓋し箕山の意は、その凡例に「此書の意味好色をすゝめて、是非當道に入しめんとの志にはあらず、行かでかなはじと思ふ人あらば、少しは道を辨へて行べしとの謂なり、曾て道を知らぬ人は、此書を見たりとて、行ぬ人の行にもあらざれば、是なん勸惡の書とは言難かるべし。當道に長ずれば忽ち身を失ふと知らする所は、勸善

懲惡の心ばへならずや、然る時は當道教誨の端とも見給ふべし」と記せり。これ本書の論旨と偶合せるにて、一道の哲理またこゝに潜むを見る。本書一群の書籍が、右樣の内容を持ちて版行せられしにも關はらず、とかく誨淫の書なりとして、一部の人に排斥せられつゝあるは、深くその根本を解せざる、所謂皮相の見なりとす。

なほ本書原本は題簽を逸せるを以て、本會同人三村竹清氏の筆になるものを用ひ、表紙も原本に準據して、これに似合はしきものを附したり。

（原本、名古屋、伊藤爲之助氏藏）

吉原下職原

半紙本　一冊

延寶度における吉原本は、寛文盛時の後をうけて、これまた數多く刊行されたり。柳亭種彦の『吉原書籍目錄』に載する所のものゝみにても、十指を屈して餘りあり。しかもその大半は案内記を兼ねたる評判、否禮讃書にて、市内暗娼への對抗策として出版したること、本會各期に亙れる解說にて縷述せる如し。本會また其頃の『吉原大雜書』『山茶やぶれ笠』『吉原戀の道引』等、いづれも稀覯を以て稱せるものを複製提供せるが、今期に至りさらに珍中の珍たる本書を刊行し得たるは、原本愛藏家の寛量によるものにて、深く謝する所なり。

本書原本は竪六寸三分、横四寸六分、中本と半紙本の中間の大さなれど、複製本は便宜上半紙本に仕立てたり。全卷三十三丁（内序一丁半、跋一丁半）なれど、十七丁の前半葉と十九丁を缺きた

り。その書名は『吉原書籍目錄』にも見え、また『高潮』第二號（明治三十九年三月發行）、『日本小說年表』にも出で、また『軟派珍書往來』に解題あれど、その全貌は未だ知る人尠かるべし。或書にその作者を、序文の末に「于時延寶九年　若信述」とあるによりて、この人とすれど左にあらず、卷末に「此下職原者吹上氏免足路鳥蒙梵天王勅撰所也　作者米河岸之住人ほんほち氏大ぬれや茂助（花押）」こそそれなり。かの澤田東江の作れる『古今吉原大全』に「醉鄕散人」とせる如く、かゝる樂事には、誰とても正しく署名する者なきは、從來の類書に徵しても明かなれば、或は序跋本文とも同一人の手に成りしやも測り難し。たゞこゝには序者作者と兩樣に分別せるに關はらず、とかく混同するを以て、こゝに明記するの要あり。刊記は「延寶九年（天和元年）酉三月上旬さうしや權右衞門開板」と見ゆ。

遊女評判記は、概ねその體樣を、『島原集』に則りたれど、年所下るに從ひ『吉原大雜書』の如く、曆本の『三世相大雜書』に擬せるなど、とかく看客の注意を牽かんとする作者の好奇心と、その筆を執るもの〻多くは、隱遯せる俳諧者流なるより、その形式題名にも苦心を拂ひたり、本書もその例に洩れず、序文の「おほやけの官位を定る書物を職原といへり、さればそのみなかみに尋ねて流をたつる下々の位を定めし草子なれば、吉原下職原と是を名づくる」と、跋文の「人來問曰客下職原者、貴人官位假奪而遊女卑職譬、我聞職原在女官何其以女職、遊女下職不書乎、答云在職原女官世人知之希、今撰所雖非女官世擧知故准是云」とあるにて、その趣向の由て來る所を知るべ

し。故に遊女に配するに「大上大身正一威　太夫高尾、大那言從二威　格子青柳」、或は左右大身、大中那言　參議などの文字を以てす、その品位によりて、それ〴〵百官の名を附し、次位の遊女には「無官新造之次第」として、その項目を分ちたり。收むる所の太夫十八人、格子七十二人、新造三十六人を月旦するに『吉原袖鑑、同譜嘲記時之太鼓』の例に准ひ、本書には格子の四天王、四大納言、また若四天王を撰み。更に前年刊行せる『吉原芹川』が、三浦山本兩家のために曲筆せるを駁擊し、自ら公正不偏なるを以て高しとせり。かゝる手法は既に早く野郎評判記に創められ、寛文度の『野郎古たゝみ』と『雜野郎古たゝみ』（假題）、『野郎天邪鬼』と『野郎毘沙門』など、雜陳答問せるもの數四出でたり。當期の類書はたゞに吉原を透視するに止まらず、時代の世相風俗を察知し得る所に價値あるなり。

殊に寛文以降遊女の容姿態度を、時の人氣俳優、操人形に對比して概評せり、本書にをいて最もその顯著なるが見らる。「西尾」の「物腰のちと聞にくき所あり、いはゞ堺町出來島吉十郎が如し」。「市野」の「踊口說に一に市野は竹之丞（市村）によく似たと何者か見立けるぞ　あふそれ〴〵似たも道理なり、ちと緣者中そうな、（中略）とても似るものならば七三郎か左源太などに似給はで」。「鹿島」の「道中餘り反り過ぎて竹之丞が女方の樣なり」。「三笠」の「小內匠（土佐節の太夫）が遺ひ人形の樣にて合點首也」。「松か枝」の「目尻下りて籐齋人形の樣なり」。「坂田」の「今時世間の流行物に坂田の金平といふ人形は和泉大夫が家の重寶（中略）この君もちとは似給へかし」とあり。

その上本書によりて發明せるは「市野」の條の末に「竹之丞は一座の太夫なれども女方におゐては又なき下手なり」と痛棒を加へたる一節なり、この竹之丞は市村座の四代目にて、技藝の譽れ高かりしが、無常を感じて二十五歳のとき（延寶六年又は七年といふ）佐藤憲淵發心して西行法師となる狂言を名殘とし、舞納の日に剃髪して舞臺より笈を負ひて佛門に入り、のち本所自性院に住せるより、世に竹之丞寺といふとの事蹟を殘せる人なるべし、座主として重責ある身が遁世するの止むを得ざるに至れるは、かゝる不人氣が齎らせるに非ざるか、更に考究するの料となるべし。

その他、諺語の「石部鐵右衛門（石部金吉）、借錢を質に置く、親に似ぬ子は猿（鬼）の子、瓜を二つにわつたほど似た、山の芋鰻になる、品川鰒の横飛び、蛙の願立」花街語の「とりん坊、年增、姉分（姉女郎）、野暮、お茶番（お茶挽き）禿立ち、横番（『色道大鏡』に「金山詞より出たり、人の入りて堀山筋を、此方より切とるを横番といふ、是によりて當道にも人の擧置たる傾城を我物にし、忍びて犯すをしかいふ」とあり）」と、「今泉」の條に「大盃者」云々は、大盡者と共に此頃の用語にて、後の大酒家といふに同じく、所謂女猩々なりしなり。

挿繪は一頁を二段にして、その下欄に「高尾、小紫」等を描けるもの六面を卷首に、見通しのもの二面（内一頁缺）あり。畫風は菱川師宣の筆致にて、弊衣の浪人が書冊を手にして、小紫に物理心術を說ける狀、獅嚙火鉢を圍みて宴遊する傍に、蒲團と葛籠を畫けるは、『吉原鑑の道引』の「揚屋行き」の畫面を賣けたり、こは『一目千軒』に「女郎揚屋極まれば夜具をはこぶ、此入ものは皮

つゞら長持など也」とある如く、此頃は三都ともみな同じかりしが、江戸は寶曆に至りて揚屋廢絕しその事絕へたり、かゝる古制を徵證するにも、本書こそ最も重要なるものなるべけれ。

（原本、東京、忍頂寺務氏藏）

延命字學集　半紙本　一冊

役者評判記は、萬治三年版の『野郎虫』（本會第三期刊行）を始めとす、所謂姿色本位物の體樣は、各優繡像の上に禮讃の詩歌を添ゆる底の定型に陷りしより、類書の刊行を重ぬるに當り、斯種の作者が新趣向の案出に苦慮せる所ありしが察せらる。その上に演劇の進步は、技藝本位の評書を生じ、前者には『剝野老、難野郎古たゞみ、野郎大佛師、垣下徒然草、一本菊』より下りて『年の花、簑張草、野郎關相撲、雨夜三杯機嫌、姿記評林』等最も著はれ、後者にありては『難波立聞話野郎立役舞臺鏡、役者にぎりこぶし、役者いかづち』など出て、遂に元祿十二年版の『役者口三味線』の形式に統一されたり。また姿色物は享保六年版の『三國朗詠狂舞臺』を最後として全くその影を沒したり。本書はこの兩者交錯せる時に出てたるものにて、特異の內容を有する姿色評書なり。本文一頁乃至四頁毎に優人の畫像と紋所、役柄、氏名を記し、その上に容色を讃美せる狂詩を掲げ、その他葉は全部節用集に擬して、言語、人倫、支體、食部、衣部、器財、草花、時候等の部門を設け、各門に假名を附せる數百の語句を、いろは分けに列記せり。著者がかゝる形式を取れる

の辨は、序文に男色の勝れたる所以を說き、「今飛切の女方いと最情(なま)めくとりなりは都女郎にすらまれなり況や鄙におひておや故に顏子が一瓢の水淸く相女が四壁の風涼して山居せし人も或は德高く富貴茂其外葛天の民までつかへをさげ命を延る事是なん依之各趣所好美少人の姿を繪がき纔に和名の文字を集む徒に茂此繪形を見ば必す其眼字書に移り天然と所用の文字を覺なば是生涯の德ならん」とあり。卽ちその旨とする所は、眼を繪畫に移して命を延べ、且つ自らにして有益の字句を學ぶことを得るてふ、所謂一舉兩得の書なりといへるなり。

本書は守隨憲治氏編の『增訂役者評判記年表』に、その書名の出でしが初見なるべし。そのゝち吉田暎二氏が『藝術殿』（昭和七年九月號）に「役者評判記四ツ」と題し、稀覯評書を紹介せる內の第一に擧げしより、漸くその內容が知られたり、然るにその書は落丁本にて、卷末の數葉を缺けるものなりしが、本會使用の原本は首尾全く備はれりとは言ひ難きも、研究考覈に何等缺く所無く、且つその全貌が呈出さるゝに至りしは欣快に堪へず。

本書原本は卷末の刊記を缺けど、序文に「于時元祿十二卯ノ五月侵筆於男女川流　出岫印」とあるにて、その刊行年時が知らる。またその寸法は竪七寸四分半、橫五寸二分半、全卷廿四丁半（內序文二丁）にて、所收の俳優は、

女方　玉澤皆之丞　　女方　津川半太夫
女方　袖崎歌流　　女方　松本兵藏

女方　岸田小才次　　女方　西川岡之助
女方　澤村小傳次　　女方　村山九重
女方　水木染之助　　若衆方　松本小四郎
若衆方　杉山虎之介　　若衆方　橋本金作
若衆方　出來嶋大五郎　　若衆方　山澤林之丞

の十四人なり。右の內「玉澤皆之丞、松本兵藏」の名は、元祿七年京版『野郎關相撲』にあれば、その後に東下せしなるべし。「澤村小傳次」は元祿九年頃版『野郎にぎりこぶし』に、「松本小四郎、杉山虎之介」は共に、同五年版『役者みゝかき』に見へたり。しかして本書刊行の翌十三年の『風流四方屛風』には、「岸田小才次、西川岡之助、松本小四郎、澤村小傳次、水木染之助、松本兵藏」の諸優が描出されをるを以て、何れも當代第一の人氣を負ひたる美少年を收載せるが知らる。

また贊辭は『野郎虫、剝野老』の優婉なるに較べて、本書のそれがやゝ卑俗なるは、時世の好尙を反映せるにて、深くこの作者をのみ咎むべきにあらず。吉田氏が『野郎虫』に「山本金太夫」の評「金枝鶯曲友、太似子瑕顏、預護桃後、一朝容色寒」と、『剝野老』の「瀨川藏人」の評の「瀨茫一葉舟、川沈思悠々」「藏却嬋娟奈、人生一夢愁」を引きて、本書の「出來嶋大五郎」の「爲遊蝶願吸君口」や「思爲黃蜂螫王尻」に比せるも、またその好例とすべし。これと共に繪像の圖柄も、『野郎大佛師、垣下徒然草』の如き歌仙式のもの、または舞臺面の全景乃至遊宴圖の如きは、古版

評書に見らるれど、本書の如く各個の舞姿（村山九重、杉山虎之介の如き）を現せるは、元祿以後の現象なりと考へらる。殊にその枕に凭りて横臥せると、香を傍に手を懐にせるなどは、遊女物の『吉原鑑』挿圖と同一なるは、前出の贊辭の露骨なるに比例して、畫面も漸く現實味を帶ぶるに至りしならん。なほ本書の畫者を鳥居清信と認定せる人もあれど、當期の繪人狂言本浮世草子等に照合して、やゝ見劣りの點あると、清信の傑作と稱せらるゝ『風流四方屏風』が、本書刊行の翌年に出版せるものなるが、兩書所收の人物姿態が、その筆致に繁簡の差あれど殆んど同意匠なり、蓋しその骨法に至りては霄壤の差あり。いまその比較表を左に掲げて參考に資せんに、

本書	風流四方屏風
玉澤皆之承	岸田小源次
津川半太夫	山下小才三郎 澤村小傳次
松本兵藏	岸田小源次（左向）
西川岡之助	生嶋大吉
澤村小傳次	山下小才三郎
水木染之助	荻野澤之亟 岸田小源次
松本小四郎	吉川多門
杉山虎之介	勝山又五郎

出來嶋大五郎　　市川團之承

の數圖が擧げらる。しかして『四方屏風』出版の用意ある清信が、その下準備として前年に本書の如き同巧にして簡素なるものを執筆せしか。或はまた從來の遊女繪役者繪より意匠を抽出して、無名の作家が鳥居派の畫風に擬して描寫せるかの二つに出でざるべし。若し後者を眞なりとせば、『四方屏風』序文の「近來私の類板を出す彼一紙を見れは繪の風俗風流の誤り多し」に相當するものなり。記して後證の出ると諸家の研鑽を俟つことや大なり。

節用文字には俗語に漢字を當てしもの多く、しかも今日通用せざる字句大半を占めをれり。その二三を例擧せんに、爲々（いざ〳〵）如狐々（によこ〳〵）十三（ぼた〳〵）詮怙（とにもかくにも）龍鐘（おそろし）耳從（なにかはせん）平懷（こなす）等その著しきものなり。その他「問無親此天縱相」は親は無いかを「蘇行惠心御作公」は安阿彌の御作など、若道を稱美せる通言を漢譯せるものなり。また風俗の參考とすべきは、序文に「水木風の小袖を肩にかけ（中略）荻野流の帶を腰にまとふ」とあり、世に水木帽子澤之承帽子を考證せるものあれど、この兩者に言及せるを聞かず。かく演劇史風俗史の缺漏を補ひ得るは、實に貴重資料の顯現にあり。多年その名のみを聞きし本書の提供は諸家の研究を完成へ導くの東道として、必ずや價値あるものなるを信ず。

なほ卷末々葉の柱心にも「延命字」、同下部に丁附ありたらんも、原本毀損してその有無分明せざるを以て、故らに補刻せず。また原本題簽は逸脫せるにより、本會同人三村竹清氏の筆に成れる

ものにて補ひ。表紙もその時代を考慮してこれに相應せるものを附したり。

（原本、東京、安田文庫藏）

せりふ大全

牛紙本　一冊

せりふ盡の發達に就ては、本會第八期刊行の『役者身振氷面鏡』の條下に『六方詞』（延寶元年）の如く、俳優の名臺詞を集錄し、これに挿繪を加へて刊行せるものあるを說き、次で「石山源太名のりせりふ」、「竹原大六名のりせりふ」等の出でたると、『新板役者繪盡』の頭書に、當時知名の俳優のそれを掲載せるを述べたり。上方にても元祿版の『輕口咄』に、コワイロ（聲色）を使ひたる記事あれば、その頃の好劇家が前記の諸書を流觀し、その聲音に擬して暗誦せしこと想像に難からず。本書またその一類にして、せりふの集冊として『六方詞』に次げる古版なり。

本書原本は竪六寸一分、横四寸四分、全卷九葉なれども、丁附に「一、二、三四、五六、七、八、九、十十一、十二」とあるは、古版本には間々ある慣例なり。題簽に「せりふ大全」と八分字に書き、「いきごみはり合」「□りしやうざし」とその左右に細書せり。原本損傷して不明の個所あるを以て、これを伊原青々園氏に質せしに、「御尋ねの題書の文字いろ〳〵考へ候が「くぎりしやうざし」にて無之候や、くぎりは句切、章は節、さしは「挿し」にて挿入の意味ならんか、但し「くぎり」にては、あの黑き部分に文字かさばり候、又「章」は義太夫詞にて、江戸のセリフにつ

かひしか疑はしく候、本文に「上、下」など指定有之候樣子、それを「章」と呼び候かとも思はれ候へども、コヂツケかも知れず候」と敎へられたり。いま缺字のまゝとして、他日の解明をまつことゝせり。また脇題簽には「市川もぐさ賣、淺尾まくら賣、たんせんらいくはう、風流などや、きんひら馬上、くわんくわつぢぞう、鳥づくし」と七行に記して、その內容を明示せるは、かの謠曲本乃至繪入狂言本などの形式を採りしものなり、表紙見返には切艾賣、枕賣の圖ありて、當時の業態をそのまゝに舞臺に立ちたるを證し、且つその風俗を知るの料として貴重視すべきものたり。

切艾賣の脊負へる箱に記せる三升屋兵庫は、初世市川團十郎の作者名なるは周知の如し。この業態の事は『近代世事談』に「元祿のはじめ神田鍛冶町箱根屋庄兵衞といふもの箱根の溫泉晒しと稱して切艾を製す、看板は艾の印に三ツ角の紋を附ける、これ市川團十郎といふ芝居役者の紋也、この切艾の製よろしとて江戸中に流布す、是を倣ひて切艾の製より庄兵衞が印に模して各三角の紋を付て、三升屋兵庫、市川屋何某など名付てこれを賣る也、團十郎がはじめたるには非ず」とありて、本書に見ゆるものは「外に此類はあまた御座れど、神田鍛冶町壹丁目の新道、三升屋兵庫、市川團十郎艾」とあるに合致せり。しかしてこれが歌舞伎化せるは、『歌舞妓年代記』寶永六年七月の條に、

二代目團十郎山村座にて、けいせい雲雀山、久米八郎の役、もぐさ賣のせりふ大でき、此ころは芝居四軒在て、立役者出端にかならずせりふ有しが、いつとなく捨りしを、團十郎艾賣のせりふ大

當りにて、江戸中子供まで是を眞似る、淺草門跡前に艾賣見世出て、團十郎の人形を看板とす、是元祖にして今も殘れり。

とあれば、初世の作者名を冠せる艾賣に扮して、二世團十郎が仕出したるにて、本書のそれはその時のせりふなるべし。なほ『浮世繪歌舞伎畫集』所載の正德三年頃作と推定せる奥村政信畫の三升屋兵庫艾賣の圖も、この時の扮裝を描きしものと思はる。その後の三升屋艾のことは、本會第五期刊行の黄表紙『三升增鱗祖』の解説にあるを以て玆に贅せず。

「枕ぞろへせりふ」の淺尾重次郎は、寶永六年十一月藤川武左衞門と共に山村座に下り、翌七年正月『傾城伊豆日記』に「まきの前」を勤めし人にて、見返しの圖上に京都のはり枕まくらゑとあるにて、恐らく江戸初下りのお目見得狂言として演じたるに非ざるや、またそのせりふは、能狂言の『枕物狂』に、『閑吟集、ぬれ佛、吉原はやり小唄惣まくり』等より、枕に關する辭句を採り、これに當世樣の種々相を雜へて作り上げたるものなり。この枕賣の圖も、奥村政信所畫の役者繪帖に見ゆ。

「賴光せりふ」の市川團之丞は、初世團十郎の門弟にて、元祿六年版の『古今四場居百人一首、野郎にぎりこぶし』にも、その若衆振りを推賞せり。殊に『役者いかづち』に「若衆方の指折り、器量隨市川誰者と竝ぶる人なし、是果報いみじきとやいわん、先づ〳〵大將の役さしては、威光の山高く、位備つて見ゆる、武道の息込み、道を立てゝの詰開き、さながら秋の紅葉かと疑ふ」とある程なれば、かの四天王獨武者を統率せる源賴光役に撰ばれたるならん。因に『神田本太平記』に、茨木童子の腕を切落せしは渡邊綱にはあらで、この賴光なりしこと見へたり、されば寛仁大度の長者よりも豪勇無雙の强者として此頃までも取扱はれ、さてこそかゝる活潑なる臺詞を言ひしならん。

次の「名古屋山三丹前せりふ」は、何人の演出せしものなるやを知らねど、元祿十二年に森田座にて、「當世阿國歌舞妓」を上演しをれり、この兩者の内なるや否や、未だ確證を得ず。

「きんひら馬上の段」は、江戸和泉太夫、後の櫻井丹波掾が創始せりといふ坂田金平の武者振りを歌舞伎に移入せるにて、その勇壯なる動作は、初世團十郎が最も得意とせるものなり。このせりふは何人が唱へしやは知らねど、「坂田兵庫守源從」と名乘り、八幡殿へ詰開きの出端なるべく、後來の曾我五郎馬上の段などに暗示を與へしものなるべし。

「地藏のせりふ」は初世中村傳九郎の所演なり、同人は中村座主初世中村勘三郎の長男にて、同座帳元を掌れる勘九郎の子なり、幼名を勘九郎といひ、のち四世勘三郎を襲ぎしが、三世の實子竹松に五世を讓りて、その身は俳優となり、元祿五年三月中村座の「奴朝比奈大磯通」に朝比奈を演じて好評を得、後世にその典型を殘せり。この臺詞には日光、大磯、太秦、四條、相摸、三條などの地藏の名を列記し、これに博戲の名目を取入れて一編をなせり、その詞章の豪快なるを見て、演

出のいかに寛潤なりしかゞ察せらる。

最終の「鳥づくし」は譽め詞なり。こは出演の俳優を見物の一人が、美音高らかに稱譽するものにて、元祿の初めよりせりふ盡と共に版行されたり。現に元祿六年の刊記ある「新道成寺 市野屋おさよ 荻野澤之丞正本」と「市川團十郎をほめことば」など世に知らる。この「鳥づくし」はまた荻野澤之丞のそれなり。同人は元祿五年江戸に下り、初世團十郎の相手となりし若女方にて、容色の美と氣品の高きより人氣を博したり。本章初句の「あの東の横雲を押分け出る日輪は、葦原國の惣名代、まつた西の引幕よりゆるぎ出たる澤さまは、安樂世界のまんまれ者」とあるにて、或は元祿九年の「女鳴神」の時のものにあらざる歟。時未だ江戸歌舞伎の混沌期を脱せず、とかく資料に乏しく、その明確を缺けり。これらは博雅の研究によりて顯現せらるべきなり。

本書刊行年時に就て考ふべきは、まづ「地藏のせりふ」が『新板役者繪盡』上巻の頭書にある「同地藏せりふ中村傳九郎ことば」と、若干の出入あるのみにて殆んど同文なり。因に傳九郎は前出の如く、元祿五年に始めて舞臺に出たる人なると、生嶋新五郎が前名野田藏之丞にて出てたるにて（元祿六年正月の『古今四場居百人一首』には「野田藏之丞 生嶋新五郎」とあり）、同書の刊行は同五年末か六年春と考へらる。また荻野澤之丞は、元祿十三年五月森田座の「大日本鐵界仙人」を名殘りに上方に歸りし人にて、本書所收のせりふが元祿年間に出でたるもの多けれど、艾賣と枕賣の上演年時を考合せて、寶永六年を距る遠からざる頃に刊行されたるものと見るべし。故に右の二章を巻首

に置き、且つ挿圖を加へ、それに當時最も多く世人に傳誦されたるものを附錄として、一冊にまとめしにやと考へらる。

「せりふ盡、ほめことば」は、それより以來「つらね」と共に、年々各座より發行せられ、寶暦明和の候に至りては、畳附、壓色本など座附板元より出るもの、一ト狂言にて十餘種が數へらる。しかしてこの「せりふ」のみは、のちに體樣を替へて『芝居壓色鸚鵡石』と改稱され、明治の末まで發行されたり。

せりふは當時の言語をそのまゝに直寫せるため、參考に資すべきもの多し。例へば「お江戸八百八丁」（二丁表）の外に「芝、神田、四谷、赤坂、麹町」その他の地名を擧げたり、世に江戸前といへる言葉の、大城の前面卽ち今の日本橋、京橋兩區を指せるものなるを證す。童謠の「いつちくたつちく」（六丁表）は、黄表紙、洒落本等に多く出るより寶暦以後のものと思惟せるに、既に此頃より兒童の間に傳唱せられ、しかも「たゑもんどのゝおとひめさんが」は「たいのめたいがむすめ」といへるより轉化せるを知る。「五體をろく地にとゝしてしつかと承はれ」（六丁裏）の「とゝ」は「坐して」の謂にて、上方語に見る所。「毛唐人をれがあんにようロ舌を眞似て扨は主らもちんふんかんひん」の語は、今も不通の言を吐くを「ちんぷんかん」といへるの原據なり。この外に所謂「もさ詞」と稱するもの多々あるを以て、當期江戸人の言語研究にも、重要なる資料となるなり。

（原本、東京、坪内博士記念演劇博物館藏）

時花唄

半紙本　一一冊

徳川期に入りての流行歌集は、寛文頃の『當世小歌揃』、延寶頃の『吉原はやり小唄惣まくり』、同四年の『淋しき座の慰』等の外、寶永元年の『落葉集』（一名『増補松の落葉』）卷七に「古來中興當流はやり歌」と題して四十六曲を收めたり。これらの歌謠はその當時河原版風の一枚摺にて版行されしと思はるゝことは、本會第二期の『元祿歌舞伎小唄番附盡』にも、「ちん〳〵ぶし、おはらぶし」あり、また他に延寶頃の「道念節」のあるあり。降りて寶永正德に至り、操淨瑠璃と歌舞伎の隆盛につれ、一トロ淨瑠璃や、劇を流行歌化せるもの及び、花街を中心とせるものが、二葉乃至三葉を綴ぢたる冊子形となりて版行せられたれど、現存するものは化政度以後の頽廢期に多く、所謂黄金時代に屬する寶曆明和頃のもの甚だ稀少なり。本會は歌謠研究の資料として本書を刊行し、この缺陷を補はんとす。

本書上卷は、大田蜀山人が享保より寶曆明和間の流行歌本を蒐集し、これに『小曲戯文』と題して、愛藏せるものにて、その書名は、既に『南畝文庫藏書目』卷二「音曲」の部に「小曲戯文　一卷」と見えたるのみにて、その内容未だ分明ならざりき。然るにこの書のちに石塚豐芥子の手に入り、その志を繼ぎて追加蒐集し、これに『時花唄』と標記して二卷となせり。いまその刊行に當り、上卷々頭に蜀山人自筆の目錄を附して、原本の面影を偲び、併せて所收の曲目を知るの便とせ

り。而してこの卷收むる所は、

金平したりやぶし
名寄大こくまい
おしやるぶし
しろたゑ（うきくさ　ゑぐち）
惣太郎ぶし（ちやん〳〵ぶし　ねざめぶし）
あれみさしやんせぶし
吉原　しやんこぶし

中年役者信太妻　大こくまい
よかん平ぶし
うきなぶし
役者問談合
ちよ切だいすぶし
わかれざか
なんのこちやぶし

の十四曲なり。「金平したりやぶし」のみは表紙を缺きたれど、その他は完備せり、字表紙の豐麗なるは古版正本の特色なるは言はずもがな、繪表紙にその頃の風俗が見られ、たゞに歌謠書としてのみならず、その見地を異にせばまた得る所多樣なるべし。

「金平したりやぶし」は、恐らく享保度のものなるべし。萬治寛文を盛時とせる江戸和泉太夫の淨瑠璃に現るゝ坂田金平が、强勇無双の象徴となりしより、すべて强きものに金平何々と稱すること流行し、その餘波本曲に及び、更に天保年間の金びら節にも影響せしならん。本曲十三首を收め、俵藤太と百虫、鷲と兎、猫と鼠と對照して、强食弱肉の實例を歌謠化せり。

「中年役者大こくまい」は、新春の行事大黑舞の壽詞に擬せるものにて、享保元丙申年京都の都、夷屋、

龜屋の三座出勤の俳優名寄せなり。表紙に「色里はやりうた」とあるは、版行者がかく名付けて、花街を中心に流行せしめしなるべし。文中知名の俳優に佐野川萬菊、瀬川菊之亟あり、何れも江戸下り以前の事に屬せり。

「名寄大こくまい」、表紙に「市村竹之亟座、金花山鎧開」とあり。この狂言は享保二年に開演せるものにて、『江戸芝居年代記』に「金花禮拜」とあるは、恐らく誤寫なるべし。なほ文中の「よもにかくれはならさかや、めんこうふはいの玉かしは」とあるは市村玉柏にて、享保三年市村座の「置土産女鉢木」に名殘狂言を演せるにて、本曲はその前年のものなるを知る。

「信太妻よかん平ぶし」は、享保十九年十月大坂竹本座上演の『芦屋道滿大内鑑』（作者竹田出雲）を、寶暦九年九月江戸市村座にて、葛の葉二役を中村富十郎、安倍保名を市村滿藏、芦屋道滿を尾上菊五郎、奴野干平を坂東又太郎、奴與勘平を大谷廣次にて演ぜし時の流行歌なるべし。たゞ江戸における版本として「座本中村富十郎」とあるは解し難し。全卷九章を收め、歌詞頗る瓢逸なり。

「來和色里はやりうた名つくし所おしやるぶし」は、前出の「申年役者大こくまい」、後出の「役者問談合」の出勤俳優名寄にて、享保二年の正月に版行せること、文中に「いつれおとらぬ二のかはり」、「座本万菊」とあるにて明かなり。

「廓色里流行唄わかれさか」と共に京版なり。本曲は表紙に花見幕の前に吹掛手拭を被れる婦人を畫き、收むる所七章にして、廣嶋と長崎、白河と黑谷、深川と淺草との如く、名所盡の中にその地名を對照して興味を唆れり。

「都鳥原流行唄京土産うきなぶし」は、江戸芝神明前井筒屋の版行に係り、所收九章、歌詞何れも優美

にして京土産の名に背かず。

「二上り歌しろたゑうきぐさ、ゑぐち」は、表紙に松島庄五郎の名あり、同人は享保十一年市村座顔見世番附に出るを初見とす。長唄正本によりて寶暦八年まで出演せるを知る。この歌曲は後來のメリヤスと稱するものに當り、その歌詞は『女里彌壽豐年藏』に收めらる。末尾に「駒井清次郎」とあるは板元山村屋の名なり。

「都町中流行唄三芝居名寄やれもさぶし役者問談合」は、これまた前出の「申年役者大こくまい」と同じく、京都三座の出勤俳優名寄にて、享保二年の正月に版行せること、文中に「いつれおとらぬ二のかはり」、「座本万菊」とあるにて明かなり。

「都の土産山彦源四郎惣太郎ぶし、ちやん〳〵ぶし」と表紙にあれど、卷中には「惣太郎ぶし」と「ねざめぶし」の二章を收む。表紙と同一の歌をかく二樣に稱せしならん。山彦源四郎は河東節三味線の名人にて、木村又八の門弟なり、始め村上と稱す、江戸半太夫の三味線方櫓左衞門の所持せる三絃にて、銘山彦を得て改姓し、寶暦六年五月歿せし人なれば、この曲も京都にて流行せるものを取りしなるべし。版元は常磐津正本の發行によりて有名なる伊賀屋勘右衞門なり。

「吉原流行歌ちよ切だいすぶし五百らかんのだうくよう」は、その初句に「五百羅漢の、しつていから〳〵、ほんにお釋迦の堂供養、すいしやう法師の跡を繼ぎ、檜のお笠で、鉢の子手にもち、江戸町々を、南無あみたうふ〳〵（中略）これ〳〵ほんさま進ぜあせう〳〵」とあるによりて、江戸龜戸

村に開創せる五百羅漢堂（天恩山羅漢寺、後に本所割下水に移り、いま目黒に在り）の中興象先和尚が、享保二年公許を得て、堂宇修復のため江戸市中を勸化（同十年二月諸堂成就）せる時のさまを唄へるものなること明かなり。「ちよきりだいす」の義解し難しと雖も、表紙繪の衣服紋樣に、羅漢寺の扁額ある堂屋を現はせる婦人が、艶書を手にせるは勸化帳を表象し、左方の婦人の箒を持てるは標幟に擬せしなるべし。これを狹斜の巷に賣歩きて、看者の一笑に附せんとする意匠の凡ならざるが見らる。本會第九期の芝居繪盡『道外形大盡舞』の首葉に「七五三飾り五百羅漢手斧始め」といへる狂言は、元文二年正月中村座「曙舞鶴會我」の一場面なり、この曲も恐らくその頃のものなるべく、以て市井の雜事が直に演劇の料となりし過程を知るに足らん。

「色里おとりくどき あれみさしやんせぶし」は、その表紙にある如く、享保十八年正月市村座の「榮分身會我」の第二番目に演ぜるものにて、坂田兵四郎の獨吟なり。羽子板を手にせる子役が踊る中に、節面白く音頭を取れる舞臺面は、當期の狂言組立の順序を知る好資料なり。收むるもの十二章、悉く吉原情緒を唄へるものにて、その流行したらんことも想像せらる。

「廓色里流行唄 わかれさか」、これもメリヤス風のものにて、これまた『女里彌壽豐年藏』にあり、「吉原流行なんのこちやんこぶし」は、松島庄五郎の二上り、三下り調にて唄へるもの。最後の「吉原流行なんのこちやぶし」は、その叙事の漸く複雜となりて、元祿以前の大まかなるが失はれつゝ行くを看取すべく。その影響を受けたるものは、本書下卷所收のものたりとす。

本書下卷は、石塚豐芥子の蒐集にかゝるものにて、收むる所十種、その表目左の如し、

あぶらやおそめ久まつ歌さいもん

本家おどけねんぶつ

二のかわりおどけ歌念佛節

常陸國あんばおどり

津むら半九郎ぶし おどりくどき

しけ太夫ぶし

いろ里はやりうたかわりなるはいぶし

色里町中はやりうたあいそじやぶし

色里まち中はやりうた十九文ぶし

道中五十三次戀の關札ほんかいなぶし

役者づくし江戸名所

これらは何れも享保より安永寛政に至るまでの歌謠にして、當時の花街を中心に盛行せしこと言ふを俟たず。

「あぶらやおそめ久まつ歌さいもん」上下二冊、內題に「あぶらやおそめ久松心中」とあり。歌祭文は世話淨瑠璃に先行して、心中事を取扱へるものにて、その流行は元祿の中頃より寶永初年に

かけ、最も盛んなりしが如し　この史實は寶永七年九月廿九日（一二の書に延寶とあれど疑はし）の事にて、これを紀海音が『お染久松袂の白絞り』といへる淨瑠璃に作りて、豐竹座に上演せるより『新版歌祭文、染模樣妹脊門松』などの類作出て、いまにその名喧傳せらる。蓋しこの歌祭文は、淨瑠璃以前既に行はれゐたる事は『袂の白絞り』の「地藏めぐりの段」に、生玉境内にて語りをることを記し、その文句の「所は都の東ほり、聞て鬼門のかどやしき、かわら橋とや油屋のひとり娘におそめとて、心も花の色ざかり、としは二八のほそまゆに、内のこがいの久松が」さへ、本書と同一なるを思へば、淨瑠璃は寧ろこの祭文より胎生せしといふを得るなり。しかもこれが江戸にも流行せるは、この正本が江戸通鹽町奥村屋の版行なるにて知らる。奥村屋は浮世繪師奥村政信が開業せる繪草紙店にて版元を兼ね、所謂紅繪發行元として有名なり。同店出版の一枚繪の標記にも繪草紙問屋とあれど、かゝる正本類をも版行せることは初見なるべし。故に表紙繪の人物も、奥村流の豐麗なる風姿にて、上方本の簡素なるものに勝ること數等なり。奥村屋の開創は享保初年と考證されをるに徵して、その刊行年代を察知するを得るなり。

「本家（あまいだ）おどけねんぶつ」「二（かわり）のおどけ歌念佛（うまいだ）ぶし（あまいだ）」「（うまいだ）節おどけ歌念佛（あまいだ）新文句入り」の三冊は同種のものにて、この飴賣のことは安永七八年より江戸市中に出たること『明寛祕錄』に見えたり。こを裏書するものは、第一冊の第九章の俳優中、瀨川雄次郎は安永六年冬澤村四郎五郎となり。芳澤崎之助は安永四年九月大坂に上り、同七年冬再び東下せり。次に第二冊の第

二章の兩國開帳飛んだ靈寶は、安永六年六月朔日より閏七月十七日まで、兩國回向院にて、信州善光寺如來の開帳に、鯰江源三郎なるものが、魚類の干物にて作れる佛像尊體の見世物を出し、その內彌陀の尊體は飛魚、頭は串貝、後光は干鱈、後光佛は常節の中に鯽の頭、臺座は吸物椀といふが如き細工したるをいひ。その次章は、安永六年芝愛宕下藥師堂水茶屋櫻川におせんといへる美人ありて、人呼んで仙臺路考といひしとあり。第三冊の第五章、白子屋お駒の淨瑠璃『戀娘昔八丈』は、安永四年九月江戸外記座にて上演し、その「そりや聞へませぬ才三さん」の文句がいたく流行せること周知の如し。また平賀源內が『放屁論後編』にこの商人と、その主人公佐次兵衞も、實はこの歌詞より取りしなり。蓋しその行態は、遠く上方の歌念佛より發生し（近松の『心中天網島』に見ゆる如きもの）、遂に飴賣に墮せしものなるべし。この正本も地本問屋が、その唱ふる所の歌詞を編集出版せるにて、飴賣自身が賣れるものには非ざるべし。

「常陸國あんばおどり」、表紙に鳥居幟萬燈等を畫き、內題に「をどりくどき」とあり、こは『武江年表』享保十二年の條に「六月上旬より、本所香取太神宮境內へ、常陸國阿波（あんば）大杉大明神飛移り給ふとて貴賤群集し、萬度家臺練物を出し、美麗なる揃の衣類を着して參詣す、程なく此事を停らる」とあり、『當世下手談義』にも、享保年中常陸の阿波大杉の神あそこへもまふこゝへも飛給ふと云ふらし、山王祇園をも欺くべき大祭毎日晝夜七日ほどはうかれ立たるをきびしく御停止仰付られ、夢のさめたる心ちして其後とんだかはねたか音もなく止ぬとある時のものなるべし。その歌詞

の冒頭の「あんばをどりがはじまるほどに、ありやりや、ばゞもでゝみやれ、ま子つれてしよがいな」云々は、寛延元年八月竹本座上演の『假名手本忠臣藏』六段目の幕明きにある麥搗歌の「みさき踊のしゆんだる程に、親仁出て見やばゞんつ、ばゞんつれて親仁出て見やばゞんつ」と同巧なるに考へて、本書歌詞もその地方の俚謠を基調とし、これに雅趣ある文句を織込みしにて、江戸にての新作とも思はるゝ所あり。

「津むら半九郎ぶし（おどりくどき）」「へんづくし」は、表紙に「じぐちくぎりしやうさし」とあり。津村節は貞享頃より京坂に行はれたる俗謠にて、帝國圖書館に「半九郎ぶし色くどき」と稱する繪入正本一冊ありて、その奥附に「根本半九郎ぶし、つむら長左衞門直のうつし」と刻記せり。それには「水づくし、けだものづくし、町づくし、山づくし、新地はしづくし、くさばなづくし、髮づくし、宮づくし」の八章を有し、その歌詞は『奇書珍籍』第二輯と『近世文藝叢書』第十一に收載されたれど、後者はいかなる故にや一二章省略されたり。本書は江戸芝神明前角井筒屋の版行なれば、他の歌謠と同樣いつしか移入流行せるものにて、その刊行年時は享保年間なるべきこと、同店版行のものにて明かなり、（例へば鳥居清倍畫の「矢根五郎市川團十郎」の細判漆繪は、享保十四年正月中村座「扇眞方會我」の所演なること）かく江戸にても行はれたれど、依然として何々づくしの舊態を脫せざりしより、他の新歌謠に壓されて、やがて衰退の途を辿りしならんか。

「しけ太夫ぶし（いろ里はやりうた）」「かわりなるはいぶし」は京版にて、表紙に獨樂を弄べる人物を畫き、「くろも

ん通よこせいめい上ル町吉文字屋太兵衞板」とあり。豐美繁太夫は始め宮古路を稱す、のち一派を成して豐美と改めしは、寛延二年の頃なり。主として大坂の劇場に出演し、延享元年十一月角の芝居「葛の葉道行」、同二年正月中の芝居「井筒業平道行」等ありて、今も同地にこれを傳ふ。その曲節に哀調を帶びたるより、義太夫節にも多く取入れられ、さきに隱退せる竹本土佐太夫は最もそれを能くせりといふ。本書はその節調を取れるものにて、歌詞こそ諧謔味ある替文句なれ、切々たる哀音は、遊里を中心として歡迎せられしなるべし。殊に興味深きは、毎章「ふつつり何々せまいぞと、何々して見ても、何々に、此まあ何々には何がなる」とあるは、寶曆三年三月江戸中村座にて、中村富十郎が演じたる『京鹿子娘道成寺』の第五章末節に「ふうつり恪氣せまいぞとたしなんで見ても、情けなや、女子には何がなる」の原據なるにあり。かゝればその唄ひ方も、初演にはこれに倣ひしこと想像するに難からず。これによりてその刊行の年時をも推考し得べきなり。

「色里町中（はやりうた）」「あいそじやぶし」これも京版にて、「ぎおん新地末吉丁福居板」と表紙にあり、これに粗朴なる筆致にて美人の立姿を畫けり、歌詞も大體前の「なるはいぶし」に相似し、その刊行年代も、前書を距ること遠からざる寶曆の末か明和の初めと考へらる。

「色里まち中（はやりうた）十九文（トクブン）ぶし」は表紙に「大坂しゆんけい町きのや橋筋北へ入　赤こし嘉兵衞板」とあり。表紙繪の行燈に「よりどりなんでもかでも十九文や」とあるは、商品代價均一の賣店にて、そのことは『嬉遊笑覽』に『錦繡丈岳獨吟』の「我家が近うて咄あまりなり、なんでも九文鼻毛まで

濟」とあるを引き、早くよりかゝる店のありしを述べたり。また『我衣』に「享保八九年の頃、櫛笄三ツ櫛放し櫛其外女子小道具品々を、現金掛直なし安賣代十九文にて目つきによりどらせ賣る商人あり、殊の外はやりて後には町々辻々にて上物をも並べをき、三十八文一通品々十九文品々、或は十三文一通品々數多並べ、小刀はさみ糸類將棋駒三味線道具鼻紙入緒締盆塗物きせる鏡剃刀人形墨筆の類に至るまで、右の價に賣て、少々も利に成るものは何にても置て賣ゆく、見物の人多く珍しきゆへ調る人多くいよ〳〵繁昌したり」とあり、これ江戸のことなれど、既に早く上方にて行はれしこと明かなり、これらの業態は、今も露店にて見られ、また「十錢ストアー」といへるものにも稱へり。本書の「なんでも十九文それでてうであろ」も、その呼聲を取りて囃子詞とせしにあらずや、またその店もジウクモンヤといはず、トクブンヤと唱へしより、かく曲節の名にも取りしなるべし　その刊行は本書原本表紙に「明和四丁亥年」云々と墨書あるにて、その頃なるが知られ、その次頁に「烏曉サマ」と墨書（この墨書二ケ所は複製本にては削除せり）あるは、明和年間に富士田吉治、荻江露友と雙稱されし長唄の岸田烏曉にて、此唄もその當時大坂より移入されしこと察知せらる。（この商人一旦中絶し、文化頃に再び流行せることは『式亭雜記』にあり）

「道中五十三次戀の關札ほんかいなぶし」は版元名なけれど江戸版なること疑ひなし。題名は豐後節の「駒鳥戀關札」長唄の「吾妻振花の關札」などより取れるなるべし、關札とは大名諸侯が宿入りする當日に、この驛端二ケ所と、宿泊所（本陣又は脇本陣等）の前に、建つる木札に、その旨を記せるをいふなり。東海道五十三次の驛名を讀込たる歌詞にて、日本橋より京まで十章を以て成れり。その行文は「海道下り」乃至「道中往來」の影響を受けたるものにて、節面白く唄はれつらんも、內容甚た空虛にて、到底享保以前の大まかなるに如かず。

「役者づくし江戸名所」は、安永天明寛政に亙りて活躍せる俳優の名と、その頃の名所を讀込みたるもの各六章を有せり。俳優には大谷德治、松本幸四郎（高麗屋）、中山富三郎、松本米三郎、中村喜代太郎、市川男女藏、同八百藏、岩井半四郎（杜若）、瀨川菊之亟（濱村屋）、小佐川常世、尾上松助、吾妻藤藏、坂東簑助、市川團藏、中村野鹽、市川團十郎等の名を擧げ。名所には向島方面の三圍、白鬚、秋葉、梅若、隅田川と、龜戸の梅屋舗、萩寺、上野、日暮里、染井に、花街を有する吉原、品川、兩國、土橋仲町、遠くに眞間あり、中に番場の多田藥師は、その頃江東の一名所として風雅の人士の杖の曳きし所なりしに、今は知る人だに無き程の地となりしを惜しむ。本書の刊行年時はその第六章に「お江戸市川親玉に小玉のすをふ大太刀」云々とあるにて、寛政七年版なるべし。この「親玉」は言ふ迄もなく五世市川團十郎なり、「小玉」は五世の外孫なる七世團十郎の童名にて、同人は寛政六年秋四歳にして、市村座の「神靈矢口渡」に新田德壽丸に扮したるを初舞臺とす、その時叔父六世團十郎の門弟となり、名を新之助と改めしも、小玉の名はその頃の好劇家の間に喧傳されたり。しかも祖父たる「木場の親玉」は寛政八年冬隱退せるより考へて、前記の如くに推定せり。しかしこれらの俗曲は、當時の演劇所作事にも取入れられしなり、その一例を擧ぐ

れば、寛政十年十一月市村座所演の「鄙曲好中車」に「ふつとお前にあふてから遣瀬ない程やれこりやナア忘れもやらぬ思ひとはとふに知つてゞ有ふのにヲヽサしんぐいく」とあるが見らるまたこの歌謡も内容にさまでの面白味なけれど、次期の廢頽的なるに比しては、未だ寛濶なる格調あり。されどこれらのものすら、やがて潮來節、よしこのなどの鄙曲に却けられ、遂に歌謡の世界はとゞ一となり、甚句となれるなり。

（原本、東京、加賀豐三郎氏藏）

稀書解説第十編　終

附録

『稀書解説』補遺

『佛説摩訶酒佛妙樂經』

第二編四九頁三行目、渡邊粲の跋文中に「癸未夏」とあるは、家藏原本に據れば「癸未末夏」の誤り。然るに此の癸未末夏の四文字は、原本裏見返しの跋、左の面の第二行目上にある、卽ち第二行目は、癸未末夏　優婆塞　渡邊粲謹識とあるのである。ところが妙なことは、複製本には此の癸未末夏の四文字が無い。之は校合の見落しか。とにかく複製底本には此の四文字があつたらしいことは、解説のうちに説かれてあるから判る。是れは、校合のをりの千慮の一失か。

なほ家藏原本は、複製本のやうに經卷仕立であるが、表紙は紙に布が貼つてあり、布の色目は、黒みがゝつた藍の色である。

『猿蟹合戰』

第四編五九頁で、『寸錦雜綴』を引いて、それに初丁を轉載してあるのと同じ本のやうに、『解説

上意味がとれるが、『寸錦雜綴』に載せた赤本『猿蟹合戰』と、複製會本の『猿蟹合戰』とは全く別物である。少くとも、初丁同士は違ふ。それは『寸錦雜綴』と見較べたら判る。これは解說者の誤解である。さうして私見では、『寸錦雜綴』本の方が、此の複製會本よりも古きものかと思ふ。卽ち『寸錦雜綴』本を寶永と見ば、複製會本は、その以後――享保頃と見るべきだ。

『浴衣合』

第五編九五頁十一行目に、寛永以後のことなるべしとある寛永は、寛政の誤記であらう。之は、前後の文意から然うである。天明度には、未だ浴衣がけにて外出のことなく、それが寛永以後に於て男女とも浴衣を着て外出とはをかしい、寛政以後であらう。

（尼崎久彌氏寄）

『正直咄大鑑』の初刻年時に就て

本會第四期刊行の『正直咄大鑑』の解說中、その跋文を引きて貞享の版刻にあらずやと疑問符せしが、本年五月の『弘文莊待賈古書目』に、同書の一項あり、その卷末に、

作者　石川流舟
日本繪師　菱川師宣
維時貞享四武次丁卯皐月吉辰
江戸日本橋靑物町
藤木兵左衞門板行

との刊記あり。これにて同解說の執筆者故樋口二葉氏の推考の誤らざりしをこゝに報告するを得たることを悅ぶ。（昭和十三、六、二六）

新會期「第十期」の開始に當つて

本會の複製事業が、茲に愈々第十期の新しい計畫に入りますことを、會員諸君と共に喜びたいと存じます。

第九期もこの十月を以て滯りなく滿二年の版行を終へまして、引續き新期に入る次第であります。幾多の困難な事情が伴ふ本會の事業が、九期十八年間の長きに亘り繼續してまゐりましたのは、會員諸君の多大なる御援助と、又本會當事者の熱誠に因る事は申すまでもありませんが、これ一に、本會の事業が如何に有意義であるかを物語るものであると存じます。

本會の複製は、一期毎に、各種の江戸文藝資料の選定に意を用ひてをりますので、毎期包含の資料だけでも、江戸文化の大要を窺ひ見るに十分でありますが、更に各期を通じて集大成せられましたものは、實に空前なる江戸文化研究上の一大豐庫であります。第九期までに既に複製を終へた書目は、すべて二百五十四種、三百六十七冊の多數に上つてをりますが、所謂天下の孤本、若しくは之に准ずるものばかりで、何れも一粒よりの珠玉であります。

これ等の中には、其の開版當時には大いに世に流通し、極めて文化史的意義の深い書物であるものが現在では殆ど傳はつてゐないものも、案外に多いのであります。又、當初から市井の最高級の精神生活者のみの間に行はれた限定版もまた少くないのであります。これ等は、元來既に珍本であ

りますから、後世に至つて最稀覯本として扱はれる事は言ふまでもありませんが、かへつて、一世に流行したものよりも研究資料として一層價値ある貴重なるものが多いのであります。

又特に、本會の複製に於いて主力を注いでをります繪入本が、各種の文字を傳へるものと共に、江戸の風俗研究の第一資料として、最も價値あるものである事も喋々を要しません。

右の如く、江戸文藝研究の第一資料をすぐつて原本の儘に再生公刊する本會の複製事業は、この方面の研究者・同好者に對し、研究・鑑賞の機會均等を提供し、之れによつて輓近の斯界考究の盛況を見るに至つたものと申しても、敢て過言ではなからうと考へます。

木版本は、本會が專ら採用する「木版」に據つて複製する以上に、原本の微妙なる點までも再生する善法がない事も茲に重言するまでもありません。複製には所謂「かぶせぼり」の方法を採用するわけでありますが、江戸時代とは異なり、今日では、寫眞其の他の援力をも用ひます爲、往昔の覆刻に比して一層精確なる再生が期待出來るわけであります。本會の複製本が、世の識者の間に、其の原本と誤認される樣な事が起るのも單に時の經過の問題であらうと思はれます。加ふるに本會專屬の技術擔當者も長年の研究と經驗とを重ねて、愈々進歩の跡を示してをりますので、次期の複製は更に精刻なる出來榮えが見られる事と信じます。

第十期は特にまた、前期にもまして、一層價値ある研究資料、稀覯書籍の選定複製を企ててをりますことは、別記の書目に就いて見て戴きますれば明白でありますが、又併せて、在來の九期間に

なほ所期の複製を果し得なかつたもの、並びに、本會複製本を體系的に概觀して、比較的稀薄なる方面の資料をも補ふことに意を用ひてをります。

在來の會員諸君には茲に此の際益々御力添を懇請いたしますと共に、江戸文化・江戸文學を論じ、斯界に志を寄せられる諸賢の進んで新しく入會せられん事、切望に堪へません。

昭和十一年十月

稀書複製會

同人（五十音順）

市嶋謙吉
上田萬年
林若吉
三村清三郎
安田善次郎

主事　山田清作

15
394

昭和十三年十月二十五日印刷
昭和十三年十月二十八日發行

稀書解說第十編

非賣品

不許複製

編輯兼發行者　東京市牛込區富久町八十四番地　山田清作

印刷者　東京市本郷區眞砂町三十六番地　日東印刷株式會社　龜谷良一

發行所　東京市牛込區富久町八十四番地　米山堂
電話四谷(35)三四六一番
振替東京三三五〇九番

終